



TITLE:

出自神話でみるドイツ史

AUTHOR(S):

佐々木, 博光

---

CITATION:

佐々木, 博光. 出自神話でみるドイツ史. 人文學報 1992, 71: 97-133

ISSUE DATE:

1992-12

URL:

<https://doi.org/10.14989/48386>

RIGHT:

# 出自神話でみるドイツ史

佐々木 博 光

- I 出自神話の位相
- II 種族なき王国
- III 生きていた過去
- IV 膨脹・増殖する出自神話
- V 出自神話でみる戦後

## I 出自神話の位相

とつぜんで恐縮であるが、クンタ・キンテという名前をご存知であろうか。かれは、最近亡くなったアメリカの黒人作家アレックス・ヘイリーの『ルーツ』という小説の作中人物で、奴隷狩によってアフリカからアメリカに連行された著者ヘイリー自身の七代まえの先祖にあたる。この『ルーツ』という作品は、テレビ＝ドラマ化され、日本でも放映されたのでご存知のかたもおおからうと思われるが、アメリカでは、この小説があらわれるころから、この種のルーツの探索がひとつの流行になっていたもようである<sup>1)</sup>。ここで議論の対象となる出自神話というのも、やはり祖先が問題になるという点ではヘイリーの『ルーツ』と相つうじるものがあるといえる。ただし、『ルーツ』のばあいには祖先の考証がかなり精度のたかい調査にもとずいて進められており、したがって、こういう表現が許されるならば、それは出自実話とよぶことができようと思われる。

ところで、実話か神話かはさておき、われわれ人間はなにゆえかくも先祖がだれなのかという問題にこだわるのであろうか。ヘイリーのような個人的なルーツの探索のばあいには、現代社会のなかで喪失したアイデンティティーの回復と説明できよう。しかし、あきらかに血縁関係の存在が立証できない集団が、共通の祖先をもつと信じているばあいもあるのである。このようばあい、すなわち血縁関係を系図学的に証明することができないにもかかわらず、共通の祖先や出自をもっているという信仰をわれわれはここで出自神話と呼ぶことにする。出自神話では、祖先は男女のペア、ないしそのどちらかいっぽう、あるいはかつての英雄的な集団にもとめられるのがつねである。そして、祖先はかならずしも神々であるとはかぎらず、実在する人物や集団のばあいもありうる。したがって、後者のばあいはほんとうならば出自伝説と表

現するほうが適切なのかもしれない。しかし、両者を一括して扱うために、ここでは実話にたいする神話という広義の意味で神話という概念をとらえ、総称して出自神話と呼ばせていただくことにしたい<sup>2)</sup>。

では、このような架空の祖先にたいする信仰は、それを維持している集団にとっていかなる意味をもち、またいかなる影響をおよぼすものなのであろうか。この問題をドイツを例にとって考えるのがこの論稿の趣旨である。そのさい、ドイツの社会学者マックス・ヴェーバーの以下に示す「種族的な」集団“ethnische” Gruppe にかんする定義を導きの糸とする。

われわれは、つぎのような人間集団を、血のつながりが客観的に存在しているかどうかにはまったくかわりなく、「種族的な」集団と呼ぶことにしよう。すなわち、外的な特徴、習俗または両者がにているとか、植民や移住の記憶があるとかいうことにもとづいて、共同態関係の拡大にとって重要となるしかたで、出自の共通性を主観的に信じている人間集団であって、しかもそれが氏族でないばあいには（下線筆者、以下同）<sup>3)</sup>。

わかりやすく言いかえるならば、氏族でない、すなわちじっさいには血縁関係が存在していないにもかかわらず、出自あるいは祖先を共有しているという信仰をもつ人間集団を、いま「種族」という概念で表現しようというわけである。

むろん、ヴェーバーの定義が「種族」にかんする唯一の定義というわけではない。むしろ、この概念の用法は混乱をきわめており、論者の数だけ「種族」概念もあるといったほうが的確かもしれない。ただし、大別するならば、「種族」の認識にはふたつの方法が考えられる。ひとつは、ヴェーバーに典型的に見られるように、成員のもつ主観的な意識を重視して「種族」を識別しようとする方法であり、いまひとつは、成員の客観的な属性を指標として「種族」を判別しようとする方法である<sup>4)</sup>。筆者は、ここでドイツ人の種族意識の形成を論じるにあたって前者のアプローチを採用しようと思うのであるが、それは以下の理由による。なぜなら、「種族」とは、原初的には「種族」意識のなかにしか存在しないと考えるからである。むろん、それは意識のなかにとどまりつづけるわけではなく、なんらかのかたちをとって発現する。そして、われわれの種族意識にかんする検討も、そのかたちの考証という方向で進められなければならないのではあるが。

この論稿では、ヴェーバー流の「種族」という概念を用い、出自神話を指標にとり、ドイツ人の種族意識の形成にかんして考察を進めることとする<sup>5)</sup>。そのさい、この「種族」という意識、すなわち出自を共有するという信仰が、国レヴェルであらわれるばあいそれを民族 Volk と、また地域レヴェルであらわれるばあいそれを部族 Stamm と、じゅうらいのドイツ史の慣例にならって呼ぶことにしたい。では、出自神話を媒介として観察するとき、ドイツという国はい

ったいどのような様相を呈するのであろうか。言いかえるならば、ドイツの種族意識はいつごろ、どのような局面で形成され、いかなる過程をへて定着し、それは社会にたいしてどのような影響をおよぼしているのか。これらの問題を考察することによって、ドイツ史を出自神話という側面から再構築するのがこの論稿の趣旨である。

- 1) アレックス＝ヘイリー（安岡章太郎他訳）『ルーツ I～III』社会思想社、1978年。
- 2) ドイツ語で Abstammungssage, Herkunftssage と呼ばれているものであり、ほんらいは出自伝説という訳語のほうがふさわしいが、本論のなかで示した理由により、ここでは出自神話とする。
- 3) M. Weber, *Wirtschaft und Gesellschaft*, Tübingen 1965, S. 237.
- 4) 「種族」研究の動向にかんしては、ひとまずつぎの文献を参照。李光一「エスニシティと現代社会—政治社会学的アプローチの試み」『思想』730号、岩波書店、1985年、191-210ページ。
- 5) 出自神話を歴史学の分野でとりあげたわが国の先駆的な研究として、つぎの文献がこの論稿の議論を進めるうえでたいへん参考になった。太田和子「現代の創世神話—新しい「民族」の生成—」（川田順造他編）『民族とは何か』岩波書店、1988年、171-186ページ。

## II 種族なき王国

いづれの国においても、みずからの国家の紀元をいつごろに設定するのかという問題は、専門家かアマチュアかを問わず、ひろく人びとの関心を集めるテーマのようである。そして、このテーマは、問題の性質上、そのときどきの政治状況に左右されやすく、ときとして神話的な色彩をつよく帯びることもまれではなかった。ここで考察の対象となるドイツもまた例外ではない。ドイツ史の紀元、すなわちドイツ史がいつからはじまるのかという問題は、はてしない論争のすえ、いまだに決着を見えていないテーマといえるであろう。いま、神話的な理解を除外するならば、ドイツ史の紀元をめぐるじゅうらいの国制史家らの議論は、おおむね以下のよう

に要約できよう。すなわち、かつて西ヨーロッパの大陸部のほぼ全域を支配したフランク王国の解体にともない、そこから東王国が姿をあらわすいちれんの政治的な画期にドイツ史の紀元がもとめられたのである。そして、このような観点から、843年のヴェルダン条約をはじめ、887年、911年、919年、936年といった年号がそれぞれの根拠をもって提案され、相互にはげしく争われてきた<sup>1)</sup>。ただし、かれらの議論にはある種の共通点も確認できる。すなわち、在地の有力者の政治的結集の背後にあらたな民族意識の高揚を認めことにより、ほぼ9世紀の中葉から10世紀の初頭までにドイツ民族は形成され、ドイツ国家は成立したという判断を下していることである。ここでは、このような論調の有効性を具体的に検証するために、この問題に多大な関心を寄せてきたヴァルター・シュレジンガーの論稿を一例として取りあげてみることにしよう。

シュレジンガー自身は、887年にドイツ国家とドイツ民族の紀元を見ている。これは、皇帝

カール3世＝肥満王がケルンテン大侯アルヌルフとかれを支持する東フランク貴族の手で廃位され、あらたにアルヌルフが国王に擁立された年である。シュレジンガーがこの年に画期を認める理由をつぎに紹介しておこう。

論点を明確にするために、われわれはさしあたりつぎのような問題を立てなければならない。そもそも887年に王位交代の推進力となったのはいったいだれだったのか。史料は一致してカール3世にたいする貴族の行動について語っている。フランケン、ザクセン、チューリンゲン、さらにはバイエルン、シュヴァーベン<sup>2)</sup>の貴族の行動について<sup>2)</sup>。

ここでいう史料とは、『フルダ修道院編年史』とレギノー・フォン・プリュムの『年代記』である。両者とも887年の項にはシュレジンガーの主張を裏づける記述が含まれている。そして、シュレジンガーに見られる論調は、かれ以外の論者にも大なり小なり共通に認められるのである。しかし、このような認識にはいささか疑問を感じざるをえない。なぜなら、有力者が特定の事件に参集したといっても、かならずしもそれが民族意識から生じているとはかぎらないからである。純粋に政治的な利害から人びとが結集するばあいもありうる。当時の有力人士にとってもっとも優先されなければならない課題とは、外敵の脅威からみずからの支配領域を防衛することであった。じっさい、887年のカール3世の廃位にさいしても、カールがノルマン人の侵入にたいしてなんら有効な措置を講じえなかったことが動機としてはたらいっていたのである。したがって、政治的な結集と民族意識の成立という問題は、ひとまず分けて考えてみなければなるまい。管見のかぎりでは、9世紀中葉から10世紀初頭にかけての、民族成立の画期とされた諸事件を伝える同時代史料の叙述に、政治的な利害以上のものを見いだすことはできないように思われる。そこで、民族の形成という問題を論じるためには、これまでとはことなるあらたな視点を導入しなければならなくなる。ひとつの可能性として、ここでは出自神話をとりあげるのである。なぜなら、ヴェーバーの指摘にもあったように、祖先(出自)を共有しているという主観的な信仰こそが民族意識のもっとも重要な指標と考えられるからである。では、じゅうらいの国制史家がドイツ史の紀元と考えた時期は、出自神話で見るとどのような様相を呈するのであろうか<sup>3)</sup>。

現在ドイツと呼ばれている領域のなかで、最初に出自神話の存在が確認できるのは10世紀のザクセンである。コルヴァイ修道院の修道士であったヴィードゥキントの著作『ザクセン史』のなかで、ザクセン人をかつてアレクサンダー大王の軍隊で戦い、かれの死後全世界に散ったマケドニア人の子孫とする説が、はじめて紹介されている。ただし、そこではザクセン人をデー人や北方人の子孫とするべつの説もあることが紹介されており、マケドニア起源説が知識人のあいだでもまだ完全には定着していなかったことがうかがえる。ドイツ史の紀元について

考察するというわれわれの観点から見ると、ここではつぎの点に注目しておくべきであろう。ヴィードゥキントの『ザクセン史』は、ザクセン出身の皇帝ハインリヒ1世とオットー1世の事績を、オットーが没する973年まで記している。つまり、それは内容的には発足当初の東王国の史書という体裁をなしている。にもかかわらず、『ザクセン史』という書名が示すように、それはザクセンという一地域の歴史として語られているのである。さらに、それとの関連で注目しておかなければならないのは、東王国の指導的な地位にあったザクセン人にとって、ドイツ人の出自ではなくザクセン人の出自が問題になっているということであろう。ザクセンは919年から1024年にいたるほぼ一世紀のあいだドイツの王位を継承したのであるが、歴代の国王のもとでマケドニア起源説をザクセン以外の地域に普及させようとした形跡は叙述史料からはまったく認められない。このため、マケドニア起源説は中世をつうじてザクセンの境界をこえることはなかったのである<sup>4)</sup>。これは、同時期のフランスとくらべてみると、いちじるしい差違を示す。フランスでは、発足当初北フランスの一角を支配したにすぎなかったカペー王家が、あらたに支配領域を拡大するたびに、フランク人から継承したみずからのトロイア人起源の神話を定着させようとつとめている<sup>5)</sup>。いまいちど確認しておきたいのだが、発足当初のドイツでは、ドイツ人の出自が問題にされることはなく、指導的な地位についた集団が他の集団をみずからの出自神話に同化しようとするものもないのである。

つぎに、12世紀のバイエルンで出自神話の存在が確認できる。ここでは、古代ギリシアの豪傑ヘラクレスの息子ノリクスを部族の父祖とする神話が見られる。ただし、この出自神話もバイエルン以外の地にひろまることはついになかった。そもそも、バイエルン内部でもこの出自神話が普及した形跡は認められないのである<sup>6)</sup>。

さて、あとにもさきにも中世のドイツには出自神話はこのふたつしか確認されていない。論者によっては、中世のドイツにもトロイア起源の出自神話が存在したことを示唆しているものもある。中世末期をヨーロッパ諸国民の形成期とみなすフランスの中世史家ベルナル・グネは、国民史の存在がネーション形成のもっとも重要な指標であるという観点から出自神話をもとりあげ、ドイツにかんしてはアレクサンダー・フォン・レースが13世紀のおわりにドイツ人のトロイア人起源に言及しているということを指摘する<sup>7)</sup>。また、900年から1300年までのヨーロッパ諸国に一貫して王国共同体理念が生きつづけていたと主張するスーザン・レナルズも、このアレクサンダーの記述をひとつの根拠として取りあげている<sup>8)</sup>。たしかに、アレクサンダーの叙述にはそのような文面が見いだせる<sup>9)</sup>。アルノ・ボルストは、トロイア起源説を中世のドイツに根づいていた伝統であると位置づけ、その一例として11世紀の年代記作家ヴィーボを挙げている<sup>10)</sup>。ザーリアー家初代の王コンラート2世の宮廷司祭であったヴィーボの著作には、なるほどコンラートの血統をトロイアの王家に遡る記述がみえる<sup>11)</sup>。しかし、これはあくまでも一家系の出自なのである。有力家系がみずからの出自にまつわる伝承を保存している例なら

ば、中世のドイツにも見いだすことができよう。問題なのは、これを一本化しようという動きが中世のドイツではついにどこからもあらわれないということなのである<sup>12)</sup>。家系の出自伝承が寄与するのは、冒頭のウェーバーの引用で慎重に区別されていた氏族の連帯感の強化であって、ここであつかう種族意識の強化ではない。あくまでも、家系の出自伝承と種族のそれとは分けて考えなければならない。フランスでは、トロイア起源説はまがりなりにも18世紀の啓蒙主義の時代まで維持された<sup>13)</sup>。それとくらべてみると、アレクサンダーが言及したトロイア起源説は、ドイツではなんの反響も見いださなかったといっても過言ではあるまい。

また、のちにドイツ人の出自意識にとって重要な役割を演じることになるゲルマン人 *Germani* も、中世においてはドイツ人を指すいくつかの呼称のひとつにすぎなかった。中世のドイツには、みずからの呼称としてテウトニキ *Teutonici*・ゲルマーニー *Germani*・アラマーニー *Alamanni* の三つがあった。このうち、量的に見ても、またその後の発展から見ても、もっとも重要と考えられたのはテウトニキであり、今世紀の初頭にフリッツ・フィーゲナーの網羅的な研究<sup>14)</sup>があらわれていこう、それを発展させるかたちでこんにちまで綿密な吟味が繰り返えされている<sup>15)</sup>。いっぽう、ゲルマーニーにかんしては、いぜんとしてこのような網羅的な検討はなされていない。したがって、ここでは管見のかぎりという限定つきで議論を進めなければならないのであるが、やはり中世のゲルマーニーはたんなる呼称のひとつにすぎず、祖先信仰の確固たる伝統の核となるにはいたっていないというべきであろう。グネは、中世末期にゲルマーニー・ゲルマーニアといった名称が頻出することをもってネーション意識の台頭の証左と見るのであるが<sup>16)</sup>、中世のゲルマーニーと近世いこうのそれとは質的にはまったくことなるものである<sup>17)</sup>。この点にかんしては、Ⅲ章でくわしく取りあげることになるのでこれいじょうふれないことにするが、ここでは中世のゲルマーニーは出自神話として取りあげるにあたっているものではないということを確認しておきたい。

種族意識の研究は、それがたとえ過去にたいしてむけられたものであっても、すくなくらず現実的な意味を帯びざるをえない。これは、歴史が現在に存在の証明を提供し、集団のアイデンティティーを保存する最たる手段であるいじょう、歴史家にとってのがれがたい宿命なのかもしれない。したがって、かすかな痕跡を誇張して、種族意識の形成をはやい時期に設定するのは慎まなければなるまい。やはり、中世のドイツには、検討にあたいする出自神話はふたつしかなかったというべきなのである。どちらもドイツの一地域の出自神話であり、この時期ドイツ人全体の出自が問題にされることはなかった。また、これらの地域の出自神話をドイツ全体にひろめようという動きもあらわれない。したがって、出自神話という観点から見ると、中世のドイツは、民族意識、すなわち出自を共有するという信仰にもとづく連帯感がまったく希薄であったといえよう。近年、ドイツの中世史家ヨアヒム・エーラーズが、1024年までのドイツをとりあげ、種族意識の有無を検討している。ほんらいフランス中世史が専門である

かれは、フランスとの比較を念頭におきながら、この時期のドイツはまったくといっていいほど種族的な痕跡をとどめていないと主張する<sup>18)</sup>。ひとことで要約するならば、「種族なき王国」と呼ぶのがふさわしいかと思われるが、これはおおむね中世全般に妥当するといってもよからう。したがって、こんごのこの分野における研究は、いったいなぜ、中世ドイツには種族意識の痕跡がこれほどまでに希薄なのかをあきらかにする方向で推移すべきものと思われる。ここでは、いまのところ考えられる範囲で、筆者なりの見解を提示しておくことにしたい。

なぜ、「種族なき王国」、言いかえるならば出自を共有するという連帯感のまったくといっていいほど欠如した王国が誕生しえたのであろうか。筆者は、この最大の秘密はフランク王国時代にあるのではないかと考える。広大な領域を支配下においたフランク王国では、王国の重要な問題を審議するために一同が会することは物理的に見て不可能であった。そこで、国王は王国内に複数の宮廷を構え、それらを巡回しながら在地の有力者と会合をもった。そのさい、ライン以東は王国集会のひとつの重要な単位をなしていた。そして、のちに在地の有力者たちが結集することになる基盤もここにあったのである。われわれは、それ以前の時代をドイツ史として語るべきいかなる根拠も見いだすことはできない。したがって、のちにドイツと呼ばれることになる単位は、フランク王国の行政区画からスタートしたといってよからう。ここに、政治的な利害を共有する舞台はいちおう整った。ただし、その経験を基礎として、かれらのあいだに種族意識、すなわち出自を共有するという信仰にもとづく連帯感が育まれるまえに、その単位を組織していたフランク王国が瓦解してしまったのである。したがって、在地の有力者は、この行政区画を政治的な結集の核としてそのごも意識しつづけたが、それに種族的なシンパシーを寄せることはなかった。これが、「種族なき王国」が誕生したもっとも重要な理由と考えられる。

議論をわかりやすくするために、ここでおなじヨーロッパ史のなかからひとつエピソードを紹介してみたいと思う。それは、中世末期のスイスの歴史である。シュヴィーツ・ウーリ・ウンターヴァルデンのスイス原初三州は、1291年8月1日、永久同盟と呼ばれる反ハプスブルクの条約を締結した。そのご、くるしい戦闘に耐えて、原初三州は事実上の独立を達成した。そして、1470年ごろのある著述のなかに、われわれにもなじみぶかいウィリアム＝テルの伝承がはじめて登場するのである。ウィリアム＝テルの伝説はスイス人のあいだにすみやかに普及し、テルはスイスの国民的な英雄になった<sup>19)</sup>。そして、この伝説にたいする共感によって、政治的な利害から発足した永久同盟が安定的に存続する道が保証されたのである。ある研究者は、これを評して、スイスは永久同盟で体を獲得し、ウィリアム＝テルの伝説によって魂を獲得したと述べている<sup>20)</sup>。この比喩を用いて、ドイツの中世を表現するならば、ドイツはなんとか体はできたが、ついに魂を獲得するにはいたらなかったといえるであろう。なぜなら、ドイツの中世にはウィリアム＝テルに匹敵するシンボリックな存在はついにあらわれないからである。こ



れが、じゅうらいの国制史家が、ドイツ史の紀元、すなわちドイツ民族の成立期と考えた時期の実態にはかならない。つまり、われわれは、「種族なき王国」という事実を認めるかぎりにおいて、ようやく中世をドイツ史の一部と考えることができるのである。

ではつぎに、なぜこの「種族なき王国」は出自意識を核とするような「種族ある王国」に成長しなかったのかという点が問題となろう。つまり、スタートは「種族なき王国」であっても、共通の歴史体験を積みかさねるうちに種族意識が育まれることはじゅうぶんにありうるし、またそうなるほうが自然なようにも思えるからである。このような問いにたいして、じゅうらいの国制史研究はおおむねつぎのような解答を与えてきた。すなわち、発足当初のドイツでは、部族と呼ばれる地域単位の連帯感が強固で、王国レヴェルの連帯感が成長するのにおおきな障害となったという見解である。すでに紹介したエーラーズも、部族とりわけザクセン人の強烈な自意識を、王国レヴェルの種族意識の成長を阻害した最たる要因として挙げている<sup>21)</sup>。たしかに、すでに言及したように、ヴィードゥキントが発足当初の東王国の歴史をみずからの出身部族であるザクセン人の歴史として語っていることから、地域レヴェルの連帯感が強固であったことがうかがえる。また、これもすでに見たように、現実問題として出自神話が地域レヴェルでしかあらわれてこないことを考えるならば、このような理解には一定の真実が含まれていることを認めざるをえない。つまり、東王国成立時に、種族意識の形成という面でもっともおおきな可能性を秘めていた政治単位は、王国ではなく、じゅうらい部族と呼ばれてきた王国の下位区分だったのである。では、この可能性はじっさいに開花したのか。言いかえるならば、地域レヴェルの出自神話は地域ごとの種族意識を支える確固たる伝統に成長したのであろうか。

この問題を考えるためには、ザクセンの出自神話、すなわちすでにふれたマケドニア起源説のそのごの発展を追跡することが有益な視座を提供してくれるように思われる。10世紀にはじめてマケドニア起源説が出現したときには、まだ複数の起源説のひとつとして紹介されていたにすぎなかった。この傾向は11世紀にもかわらない。すなわち、当時のさまざまな歴史叙述のなかで、マケドニア起源説は諸説のなかのひとつとして提示されているにすぎないのである。ところが、12世紀になるとひとつの重大な変化があらわれる。すなわち、マケドニア起源説が、以前の時代に並立していた他の起源説を凌駕し、中心的な地位を占めるに至ったことが確認できるのである。そして、13世紀の初頭に書かれたとされるドイツ中世最古の法書『ザクセンシュピーゲル』のなかで、著者アイケ・フォン・レプゴーは、すでにザクセン人のマケドニア起源説を自明のものとして語っているのである。

この地に到来してテューリンゲン人を駆逐したわれわれの祖先は、もとアレクサンドロス  
の軍隊にいた。かれらの助けによってかれは全アジアを征服した。アレクサンドロスが没し

たときに、かれらは（かれらにたいする）その地の憎しみから敢えてその地にひろがろうとしないで、三百隻の船で出立したが、それはすべてが難破して五十四隻になってしまった。そのなかの十八隻がプロイセンに来てそこを占領し、十二隻がリュエゲンを占領し、二十四隻がこの地に到来したのである<sup>22)</sup>。

ここでは、船の数までが明記されているのである。したがって、マケドニア起源説は、聖職者を中心とする知的サークルのなかではかなり定着したものであったといってもよからうと思われる。しかし、当時知的サークルに属していたのはほんのひとにぎりの人びとにすぎない。いま、種族意識を、出自を共有するという信仰にもとづく連帯感と定義するならば、人口の圧倒的な部分を占めた民衆に出自神話が浸透していたのかどうかを調べてみなければならない。では、マケドニア起源という神話は民衆にも受容されていたといえるのであろうか。マケドニア起源説の普及を丹念に追跡したチェコの中世史家フランチゼーク・グラウスの所見によるならば、答えは否となる。すなわち、歴史書や法書がいの多少なりとも民間の伝承を反映しているであろうと思われる叙述史料のなかに、われわれはマケドニア起源説の痕跡を見いだすことができないのである。したがって、この出自神話は、ひとにぎりの知的サークルに属する人びとのあいだで普及していたにすぎないと解釈せざるをえない。マケドニア人起源説はいぜん広範な伝統を確立するにはいたっていなかったのである。そして、このような状況下で重大な政治事件がザクセンを襲うことになる。1180年のザクセン大公ハインリヒ獅子公の失脚である。ザクセンの領域はたちまち有力諸侯によって分割されてしまう。これは、出自意識の浸透によっておきな障害となった。しかも、ザクセンという名称はほんらいの領域とはなんの関係もない領域に転化されてしまったのである。こうなっては、強固な部族的伝統の形成を期待するのはもはや不可能といえよう。15世紀のザクセンで執筆されたある著作のなかでザクセン人の出自に言及がなされるさい、作者は「ものの本によると」ということわりを添えている。したがって、もはやこのころになると、「ものの本による」のでなければマケドニア起源説を知ることではできなくなっていたと考えられるのである。このことは、他の作者にも大なり小なり該当するといえよう。ザクセン人の出自にかんする推論は、もはや生きた伝統から引かれるといった類のものではなく、過去の文献を参照しなければならない純粋に学問的な作業を要する分野になってしまったのである<sup>23)</sup>。このザクセンの例にわれわれはいかなる評価を下すべきなのであろうか。そこからわかることは、発足当初もっとも可能性を秘めていた地域単位の種族形成もおおむね失敗に終わったという点にほかならない。ザクセンにおいては、13世紀以降、出自意識はさらに細分化されたローカルなレベルで発展していくことになる。

では、他の部族はどうか。発足当初のドイツを構成していたのは、おおむねザクセン・バイエルン・フランケン・シュヴァーベン・ロートリンゲンの五つの部族であったと考えることが

できる。このうち、フランケン・シュヴァーベン・ロートリンゲンの三つにかんしては、いまのところ出自神話の存在すら確認されていないのである。すなわち、この三つの地域にかんしては、そもそも種族意識を構築しようという意志さえも欠如していたといえよう。フランケン・シュヴァーベン・ロートリンゲンも、ザクセンとおなじく、領域の細分化の進行という中世末期の波にまともにさらされる。これらの地域でも、出自意識は細分化されたよりローカルなレベルで発展したことが推測されるのである。五つの部族のうち、ただひとつバイエルンだけが、領域の細分化の進行という中世末期の波にもちこたえることができたように見える。ただし、ここでも領域の境界は移動し、中世の種族的な要素はほんの一部だけが伝統となって保存されたにすぎない。そして、近世いこうは、1180年くらいこの地を支配したヴィッテルスバッハ家の伝統が、中世の部族的な伝統にかんぜんにとってかわるのである<sup>24)</sup>。

以上の検討からあきらかになるのは、じゅうらい国制史の分野で過大な評価を与えられてきた中世の部族的な伝統の発展、言いかえるならば地域レベルの種族的な伝統の形成もおおむね失敗に終わったということである。いま部族を出自を共有するという信仰にもとづく集団と解するならば、そもそも中世のドイツには部族などと呼べる代物は存在しなかったのかもしれない。この章の結論をここでもういちど確認しておくならば、つぎのようにまとめられるであろう。すなわち、いま出自神話という指標にそって見るならば、中世のドイツは、そこにドイツ史の紀元をもとめたじゅうらいの国制史家らの見解に反して、「種族なき王国」という様相を呈した。この「種族なき王国」のなかで、発足当初もっとも可能性を秘めていた地域レベルの種族形成も失敗に終り、中世末期いこう出自意識はより細分化されたローカルなレベルで発展することになった。13世紀のすえにレースのアレクサンダーがドイツ人のトロイア起源に言及したのは、このような状況下においてであった。けっきょく、出自意識の局地化という趨勢のもとで、トロイア起源説はドイツではもはやなんら反響を見いだすことはなかったのである。

- 1) 研究史については、H. -J. Bartmuss, *Die Geburt des ersten deutschen Staates. Ein Beitrag zur Diskussion der deutschen Geschichtswissenschaft um den Übergang vom ostfränkischen zum mittelalterlichen deutschen Reich*, Berlin 1966.; E. Müller-Mertens, *Regnum Teutonicum. Aufkommen und Verbreitung der deutschen Reichs- und Königsauffassung im früheren Mittelalter*, Berlin 1970.; H. Kämpf (hrsg. v.), *Die Entstehung des deutschen Reiches (Deutschland um 900)*, Darmstadt 1956 (*Wege der Forschung* I.) を参照。なお、邦語では、山田欣吾「ドイツ国のはじまり—レーグヌム・テウトニクム概念の出現と普及をめぐる—」『一橋論叢』84, 1980年。
- 2) W. Schlesinger, Kaiser Arnulf und die Entstehung des deutschen Staates und Volkes, *HZ*. 163, 1941, S. 458f. また、シュレジンガーはよりあたらしい論稿においても、じゅうらいの自説の補強につとめている。Ders., Die Königserhebung Heinrichs I., der Beginn der deutschen Geschichte und die deutsche Geschichtswissenschaft, *HZ*. 221, 1975, S. 529-552.; Ders., Die Entstehung

- der Nationen. Gedanken zu einem Forschungsprogramm, H. Beumann u. W. Schröder (hrsg. v.), *Aspekte der Nationenbildung in Mittelalter (Nationes I.)*, Sigmaringen 1978, S. 11-62.
- 3) 以下この章の議論を進めるにあたっては、つぎの文献がおおいに参考になった。F. Graus, *Lebendige Vergangenheit. Überlieferung im Mittelalter und in den Vorstellungen vom Mittelalter*, Köln 1975.
- 4) *Ebenda*, S. 121f.
- 5) さしあたり, *Ebenda*, S. 85f. を参照。邦語では、江川温「中世フランス王国の民族意識—10-13世紀—」(中村賢二郎編)『国家—理念と制度』京都大学人文科学研究所, 1989年, 1—40ページ。
- 6) *Ebenda*, S. 109f.
- 7) B. Guenée (J. Vale Tr. by), *State and Rulers in Later Medieval Europe*, Oxford 1985, p. 60.
- 8) S. Reynolds, *Kingdoms and Communities in Western Europe 900-1300*, Oxford 1984, p. 297.
- 9) Alexander von Rose, *Schriften*, (hrsg. v. H. Grundmann u. H. Heimpe), *MGH. Staatsschriften des späteren Mittelalters*, Stuttgart 1958, S. 102, 108-15.
- 10) A. Borst, *Der Turmbau von Babel Bd. II TI. 2*, Stuttgart 1959, S. 824.
- 11) *Wiponis gesta Chounradi II imperatoris, Wiponis Opera* (hrsg. v. H. Bresslau). *MGH. Scriptores*, 1915, S. 16.
- 12) F. Graus, *a. a. O.*, S. 378.
- 13) *Ebenda*, S. 86-88.
- 14) F. Vigenier, *Bezeichnungen für Volk und Land der Deutschen von 10. bis zum 13. Jahrhundert*, Heidelberg 1901 (2Aufl., Darmstadt 1976).
- 15) E. Müller-Mertens, *a. a. O.*; H. Sasaki, *Deutsches Ethnos in der Entstehungszeit, Zinbun 25, 1990*.
- 16) B. Guenée, *op. cit.*, p. 51.
- 17) F. Graus, *a. a. O.*, S. 380.
- 18) J. Ehlers, *Schriftkultur, Ethnogenese und Nationsbildung im Mittelalter, Frühmittelalterliche Studien 23*, 1989, S. 302-317. なお、この章の議論を進めるさいに、つぎの文献も参考になった。Ders, *Die deutsche Nation des Mittelalters als Gegenstand der Forschung*, (hrsg. v. J. Ehlers) *Ansätze und Diskontinuität deutscher Nationsbildung im Mittelalter (Nationes VIII)*, Sigmaringen 1989, S. 11-58.
- 19) ウィリアム＝テル伝承については、F. Graus, *a. a. O.*, S. 61-72.
- 20) B. Guenée, *op. cit.*, p. 58.
- 21) J. Ehlers, *Schriftkultur, Ethnogenese und Nationsbildung in ottonischer Zeit, Frühmittelalterliche Studien 23*, 1989, S. 315-317.
- 22) 久保正幡他訳『ザクセンシュピーゲル・ラント法』創文社, 1977年, 283-284ページ。
- 23) 以上、マケドニア起源説のそのごの展開については、F. Graus, *a. a. O.*, S. 121-133.
- 24) 以上、バイエルンの出自神話については、*Ebenda*, S. 109-111.

### Ⅲ 生きていた過去

中世から近世への入口で、この「種族なき王国」におおきな衝撃が走った<sup>1)</sup>。ルネサンス人

文主義者の古典研究が活発になった15世紀の中葉に、古代ローマの著述家タキトゥスの著した『ゲルマーニア』（98年）の写本があらたに発見されたのである。強固な種族意識を発展させた民族は、たいいてい聖典と呼べるような拠所となる書物を保持しているものである。たとえば、ユダヤ人にとっての『創世記』のように。ドイツ史上で多少なりともこのような性格を備えた書物を探すとすれば、タキトゥスの『ゲルマーニア』をおいてほかにはない。したがって、あらたに発見された『ゲルマーニア』が、ドイツの種族意識形成になした寄与をあきらかにすることからは始めるのが適当であろう。

『ゲルマーニア』を含むタキトゥスのいぢれんの著作の発見にいたる経緯については、メンデルの精緻な文献学的研究が有益である。かれはタキトゥスの著作を大作群 The Major Works と小冊子群 The Minor Works に分類する。そして、『ゲルマーニア』を含む小冊子群の写本にかんしては、ヘルスフェルトの修道士の証言を手がかりとして、15世紀の中葉にヘルスフェルト近郊、おそらくはフルダ修道院で発見されたと推定している。このあらたな発見にかんする情報は、写本狩 Manuscript Hunting に血道をあげていたイタリアの人文主義者たちをおおいに刺激した。メンデルは、当時の学者やパトロンの書簡を考証の素材として、これらの写本の流入の経過を可能なかぎりあきらかにしている。それによると、いくつかのグループの搜索・競争ののちに、これらの写本はふたつの経路でイタリアにもたらされたことが判明する。ひとつは、1455年以前にローマにもたらされ、ピエル・カンディード・デチェンブリオによって利用された写本ないしその写しである。この史料のドイツからの流入にまつわる経緯は、まったく謎に包まれたままである。ただし、デチェンブリオによる1455年のローマでまさにこの写本群としか思えないものないしその写しを見たという報告、さらにはドイツで発見されたタキトゥスのあらたな諸編へのかれのさまざまな言及といった証拠から、この史料が独自にイタリアにもたらされたものであることは疑いえない。いまひとつは、アスコリのエノッホが独自の搜索によって1455年ないし56年にドイツからもたらしたとされる写本の写しである。ただし、この史料は、エノッホの隠匿によってすぐには衆人の知るところとはならなかった。それが一般に知られるようになるには、1457年のかれの死を待たなければならなかったのである。

ここで、15世紀の中葉に写本が発見されるまで、タキトゥスおよびかれの著作はまったく忘れられた存在だったのかという疑問が浮かぶであろう。結論を先取りして述べるならば、タキトゥスは、中世において頻繁に利用された作家というわけではなかったが、けっして完全に失われたわけでも忘れられたわけでもなかった。メンデルは中世におけるタキトゥスの受容を文献学的な検証によってあきらかにしている。そのなかからドイツ史に関連する例のみを紹介しておくことにしよう。まず挙げなければならないのが9世紀のフルダのアインハルトである。かれの『聖アレクサンデルの聖遺物移管』には、あきらかにタキトゥスの『ゲルマーニア』からの引用が見られる。さらに、『フルダ修道院編年史』の作成にあたっても、『ゲルマーニア』

をかなり広範に利用しているのがわかる。また、11世紀のアダム・フォン・ブレーメンの『ハンプルク教会史』にも、タキトゥスの『アグリコラ』にかんする知識が確認できるという。そして、メンデルは、アダムがアインハルトを介してよりもタキトゥスの文献から直接『アグリコラ』の内容を知った可能性のほうがたかいと結論づけている。このように、タキトゥスの受容はけっしてきわだったものとはいえないけれど、やはりタキトゥスは完全に忘れられた存在というわけではなかったのである<sup>2)</sup>。同時に、ゲルマーニー・ゲルマーニアといった名称も、中世にはまったく忘れられていたというわけではなかった。しかし、おなじ名称であっても、近世いこうのゲルマーニー・ゲルマーニアと中世のそれとはずいぶんニュアンスがことなるのである。この点をあきらかにするために、あらたに発見された『ゲルマーニア』がドイツの知識人によってどのように受容されたのかを一瞥しておかなければなるまい<sup>3)</sup>。

ドイツの人文主義者がタキトゥスのゲルマーニアと取りくむことになった直接の契機は、教会内部の諸状況をめぐる紛争であった。ドイツ司教団のローマ教皇庁にたいする苦情を受けて、教皇庁サイドの論客エネア・シルウィオ・ピッコローミニは1457/58年にながいパンフレットでそれに答えた。ピッコローミニは、さきにふれたエノッホの隠匿していた『ゲルマーニア』の写しの噂を耳にし、そのありかがある人物に尋ねている。ピッコローミニがこの写しを見ていたことはまちがいない。メンデルは、さらに、ピッコローミニがそれを筆写していた可能性がたかいと判断している<sup>4)</sup>。ピッコローミニは、『ゲルマーニアの風習、地勢、習俗、境遇』と題した論稿のなかで、古ゲルマンの野蛮な状況と現在の裕福な境遇を比較してつぎのように述べている。

別荘、公園、ブドウ畑、宝石、紫衣、絹—古ゲルマン人はまだそれらすべてをなしで生活しなければならなかった。古ゲルマン人のだれか、たとえばかのアリオヴィスト Ariovist が死者のなかからたちあらわれ、こちらに栄えた都市、あちらに温厚な人びと、開墾された耕地、礼拝という神聖な儀式を見るとすれば、この土地がかつての自分の祖国とは思えないであろう。

ピッコローミニが著述にあたって依拠した『ゲルマーニア』は、古代のローマ人から見てライン・ドナウの東に住んだ蛮族ゲルマン人の生活誌の記録である。タキトゥスがこの書物を著した意図は、ひとことで要約するならば、爛熟した都市文明のまっただなかにいたかれが、蛮族の新鮮でみずみずしい生活、気風を賛美することにより、頹廃しつつある文明社会を暗に批判することにあつた<sup>5)</sup>。このため、それが事実かどうかはべつにして、ゲルマン人はかぎりなく純朴なイメージで描かれることになるのだが、見方を変えるならば、ゲルマン人はひじょうにおくれた未開の民であつたともとれることになる。まだキリスト教を知らなかった古ゲルマン

社会にかんする叙述と現在の状況とのこのような比較の背景には、ローマ教会の恩恵をドイツ人に思いおこさせ、ドイツの教会をローマ・カトリックにつなぎとめようという意図があったと考えてまちがいなкаろう。

教皇庁側のこうした態度は、分離主義的な傾向をつよめるドイツの人文主義者の自意識を刺激せずにはいなかった。かれらは、ピッコローミニとは逆に、『ゲルマーニア』という著作のなかに過去と現在を結ぶ絆を探そうとした。かくして、かれらは物質的な価値よりも倫理的な価値、贅沢や安楽よりも美德に重きをおくにいたったのである。ドイツの代表的な人文主義者のひとりヤーコプ・ヴィンプフェリンクは、『ドイツ史点描』（1505年）のなかでつぎのように述べている。

ゲルマン人はローマ人にけっして劣っていたわけではない。なぜならゲルマン人はつねに忠誠、純血、正義、気前のよさ、誠実さを絶やさなかつたからである。

また、桂冠詩人コンラート・ツェルティスも1492年のインゴルシュタット大学の就任講義のなかでつぎのように述べている。

祖先のつましい質素な生活をつづけ、節度を守るほうが、節度をこえた贅沢を取りいれ、異国の風習を受容するよりも道徳的で名誉あることだ。

このような発想の背景には先進文明にたいするある種のコンプレックスめいたものが感じられる。そして、それは嵩じると容易に反進歩主義的な態度に転じうることが想像できる。じっさい、反文明という発想は後世のドイツ思想界のひとつの基調をなすものであり、その萌芽をわれわれはすでに人文主義の時代に見いだすのである。ただし、ここでわれわれは反進歩主義的な思潮をドイツ人の特殊性に還元するタイプの文化論に組みすべきではない。なぜなら、このような反進歩主義的な傾向は、先進文明にたいしてコンプレックスをだく後発先進地域の種族意識にはある程度普遍的に見られる現象だからである。もしドイツの特殊性なるものが存在するとするならば、それはこのようなコンプレックスをかなりながい期間にわたって抱きつづけるをえなかつた歴史状況にあるというべきであろう。すなわち、最初は人文主義・宗教改革時代のローマにたいして、のちにはバロックいこうのフランスにたいして<sup>6)</sup>。ここで出自神話という観点から、人文主義の時代がもった意義を明確にしておくことが以下の議論を進めるうえで得策かと思われる。まずなによりも重要なことは、ドイツ人がはじめてみずからの出自神話を手にいれたという点である。あらたに発見された『ゲルマーニア』の解釈をめぐる、たとえばさきに引用しておいたツェルティスに見られるように、ドイツの人文主義者たちはほと

んど無意識のうちに古代の民族誌に登場するゲルマン人をみずからの祖先と考えたのである。そのさい、なんら有効な論証がなされたわけではなかった。さらに、この出自神話は、過度に誇張された倫理性や反進歩主義的な姿勢に見られるように、きわめてイデオロギー的な色彩が濃厚な出自神話だったのである。この点で、近世いこうのゲルマーニー・ゲルマーニアといった名称と中世のそれとはやはり厳格に区別されなければならない。

この出自神話からは、後世に深刻な影響をおよぼすことになるイデオロギーが、もうひとつ編みだされている。すなわち、純血理念である<sup>7)</sup>。すでに挙げておいたヴィンプフェリンクの引用のなかに、ゲルマン人の純血という主張が見られたが、ハインリヒ・バーベルは1501年の皇帝マクシミリアンにたいする発言のなかでつぎのように語っている。

外来の要素も偶然むすびついた民族混合も、ゲルマン人に起源を与えはしなかった。そうではなく、われわれはわれわれのいま住んでいる土地に生まれたのである。

かれらの純血の主張に根拠を提供したのは、タキトゥスの『ゲルマーニア』の2章と4章の記述である。

ゲルマーニーそのものは土着のもので、すこしも他の種族からの来攻、来訪のために混淆されてはいない、とわたくしは信じたい（2章）。

ゲルマーニア諸族は、なんら異民族との通婚による汚染をこうむらず、ひとえに本来的な、純粋な、ただ自分みずからだけに似る種族として、みずからを維持してきたとする人びとの意見に、わたくし自身も同じるものである（4章）<sup>8)</sup>。

この箇所を事実としてそのまま受容するならば、ゲルマン人は純血を維持していたということになるのかもしれない。しかし、ここで、われわれはこの作品が書かれた背景、すなわち作者であるタキトゥスの執筆の動機をいまいちど思いだしてみる必要があるだろう。結論を先取りするならば、タキトゥスの2章と4章からゲルマン人の純血を導くのは、無理があるといわざるをえない。なぜなら、ここに見られる表現は、古代の民族誌において異郷の地を叙述するさいの常套句だからである。すなわち、他所者の性格描写でまず問題とされるのは、住人が土着か移住者か、純血か混淆しているかということにはかならない。そして、あきらかに古代の民族誌においては、移住者よりも土着のものを、混淆よりも純血をたかく評価する傾向が見られる。したがって、その判断にはすくなく観察者の主観的な好悪の感情が反映していると考えべきなのである。すでに述べたように、ゲルマン人の社会を賛美することによって、頽廢しつ



つあるローマ社会を暗に批判しようというのがタキトゥスの執筆の動機であった。したがって、ゲルマン人に土着・純血という属性が付与されるのはある意味で当然といえ、それは歴史的な事実として受容されるべき類のものではないのである。それでもゲルマン人の純血を主張したいのであれば、もっと決定的な証拠が必要となろう。しかし、そのような証拠を発見しようとする努力がなされることなく、当時はゲルマン人の純血がなかば盲目的に信じられたのである。また、ゲルマン人という名称の語源はラテン語のゲルメン・ゲルミナーレに遡ると考えられていた。前者は草木の「芽」を意味し、後者はその動詞で「発芽する」という意味をもつ。このような理解がゲルマン人の純血というイメージをいっそう増幅したといえよう<sup>9)</sup>。

人文主義の時代には古代の遺産が大量に発掘された。それとともに、中世のヨーロッパにはなかった神話 *Mythus* という概念が、近世いこうあらたに登場した。すなわち、神話が文字どおり神話として扱われる時代が到来したのである。この過程で、中世の出自神話、たとえばザクセン人のマケドニア人起源説などは、その信憑性が人文主義者によって完全に否定されるか、そうでないばあいでもまったく顧みられることがなくなってしまった。しかし、いっぽうで、人文主義の時代は後世に重大な影響を及ぼすことになるあらたな出自神話を生みだしてしまったのである。神話を神話として扱う基礎のおかれた時代に、あらたな神話が生みだされたということはなんと皮肉としかいいようがない。しかも、こんかいの出自神話は純血というイデオロギーをかねそなえ、いっそうパワー・アップされたものであった。のちに、この純血理念のまえに自然科学・生物学がひれ伏す時代がやってくる時、それはおそろべき衝撃力を発揮することになるのである。

人文主義・宗教改革につづくバロックの時代も、人文主義研究が確立したゲルマン人イメージをおおむね継承したといえる。ただし、ここで注意しておかなければならないのは、この全期間をつうじてゲルマン＝イデオロギーはひとにぎりの知識人サークルのあいだで普及するにとどまり、広範な民衆世界に浸透した形跡は認められないという点である。むしろ、この時期社会の深層で進展していたのは、中世末期いらいの領域の細分化と、それにともなう細分化された地域単位の出自意識の保存という状況にほかならない。

16世紀の人文主義者たちはおおむねゲルマン人とドイツ人を同一視していた。この点にかんしては、17世紀もおおきな変化はなかった。ところが、18世紀になるとゲルマン人概念の拡張ともいべき現象がおこったのである。この時期までゲルマン人研究に素材を提供していたのは、主としてタキトゥスの『ゲルマニア』であった。それはあくまでも他所者であるローマ人の残した記録にすぎず、ドイツの知識人にとっては、みずからの祖先の手による記録が存在しないということがおおきなコンプレックスになっていた。ところが、この劣等感を埋めるにあまりある史料が、近隣のスカンジナビア半島で発見された。いわゆる16、7世紀の北欧ル

ネサンスの結果、この地にもローマに匹敵する古代の遺産が存在することがあきらかになったのである。これによって、ヨーロッパ人にとってこれまでほとんど注目すべき対象となることのなかった北欧＝スカンディナヴィアが、にわかに脚光を浴びることになる。ドイツの知識人はこの北欧の文化遺産をみずからのものとするために躍起になった。そして、スカンディナヴィア人をゲルマン人の一派に組み入れることによって、首尾よくこれを成しとげたのである<sup>10)</sup>。では、かれらは北欧の文化遺産の篡奪を正当化するためにどのような根拠を提示したのであろうか。

ここでも過去の文献史料が利用されている。6世紀の修道士かつ歴史家であったヨルダネスが、世紀中葉にコンスタンティノープルで著したとされる『ゴート史』の叙述が典拠とされたのである。そこには、つぎのような一文があった。

したがって、ゴート人たちは、諸部族の製造所、べつの言いかたをするならば諸民族の子宮のごときかのスカンディナヴィア半島から、ベルグという名のみずからの王とともに出てきたことを覚えている<sup>11)</sup>。

当時すでにゲルマン人の一派と考えられていたゴート人がもとはスカンディナヴィアの出身であったという一節は、たしかに検討にあたいする魅力的な証言といえるであろう。じっさい、後世のヨルダネス研究者の最大の関心もこのスカンディナヴィア起源という言及に注がれた。そして、そのさい、これを歴史的な事実と認めるのか、それともたんなるフィクションとみなすのかが論争の焦点となってきた。この主題にかんする争点の所在をあきららかにするために、ここではこの問題に多大な関心を寄せているウォルター・ゴッフार्टの著作から論争の実例をひとつ紹介してみることにしたい。「(スカンディナヴィア起源という主張の信憑性にかんしては) たったひとつの答えしか許されないようである。ことなるアプローチをとったために、この主題にかんする近年の適度に批判的な書物の著者(ハッチマン)は、ゲルマン部族研究 *Stammeskunde* の指導的な代表者(シュヴァルツ)からきびしい告発を受けた。」そして、告発の内容が以下につづく。

ハッチマンは、ゲルマニスト、歴史家、先史学者が「スカンディナヴィア・トボス」—スカンディナヴィアをゲルマン諸族の原郷とする見方—をどのように発展させたのかを確定するために、みずからに多大な労苦を課している。…。(しかし)一次史料が利用できるときに二次史料を追いもとめる必要はない。バルト海を渡ったゴート人の旅程にかんするヨルダネスの報告は有名であり、『ゴート史』のなかにかんたんに見いだすことができる。

では、ゴッファート自身はこの論点にいかなる判断を下しているのでしょうか。かれの考えがもっとも的確に表現されていると思われる箇所をひとつ紹介しておこう。

史料分析の正常な基準にしたがうならば、ヨルダネスのなかに見られる初期のゴート人の移住は、歴史的な信憑性という点では創世記や出エジプトの物語とほとんどおなじ程度である。それゆえ、それがひとえに歴史と等価であると主張するのは宗教的な原理主義者のなせる業である<sup>12)</sup>。

筆者は、ゴッファートの指摘は正鵠を射たものであると考える。しかし、一次史料の存在を盾にとるグループとの理解の溝を埋めるのはむずかしい。ただ、ここでわれわれは、出自神話という観点からすくなくとも以下の点だけは確実に主張できるのではなかろうか。すなわち、種族の王とともに遠い故郷を去って、ながれながれて現在の定住地にやってきたというモチーフは、われわれがすでに見た中世の出自神話とあまりにも似すぎているのである。したがって、この記述も中世に見られたあまたの出自神話のひとつにすぎないという可能性は拭えない。ザクセン人のマケドニア人起源の信憑性を否認した人文主義者の理性をもってすれば、ヨルダネスの一文だけでゴート人のスカンディナヴィア起源を承認することはできないはずである。さもなくば、それは学問的にまったく公平さを欠いた姿勢と難じられよう。ところで、当時のスカンディナヴィアにはゲルマン人の末裔という意識はまったくといっていいほど存在しなかった。したがって、あらたに発見された文化遺産もゲルマンの遺産としてではなく、スカンディナヴィアの遺産として考えられていたようである。ただし、ドイツ側から見るならば、ゲルマン＝ドイツはこれによってローマに劣らぬ古代の遺産を獲得するにいたった。ヨハン・ゴットフリート・ヘルダーの「スカンディナヴィアの伝承はドイツ人の兵器庫である」という言葉がこのことを明瞭に示しているといえよう。このように、ゲルマン＝ドイツ的なものとゲルマン＝スカンディナヴィア的なものを同一視することによって、ドイツ人は永年にわたって抱きつづけてきたローマ＝コンプレックスの一端を克服することができたのである。それにともない、タキトゥスの役割はこれまでよりも相対的に低下することになった。そして、19世紀のロマン主義の時代いこう、古ドイツ文化と古北欧文化のいくぶん危険なかおりのする同一視が支配的な認識として定着していくのである<sup>13)</sup>。

近世にいたってドイツ人はようやく古代のゲルマン人を祖先とする出自神話を獲得した。それにとまって、ドイツ人の種族意識形成にとってきわめて重大な意義をもつ要素があらたに加わるようになった。ひとことでいうならば、ついにドイツ版ウィリアム＝テルが誕生したのである。その名はアルミニウス。ドイツではヘルマンと呼ばれることもあるこの人物は、タキ

トゥスの語るところによれば、ローマの将軍ワールスの圧政に抵抗するためにゲルマン諸族を統合し、巧妙なかけひきと武力によってゲルマン人をローマ帝国の支配から解放したとされる古代の指導者なのである。すでにふれたように、種族意識の形成にとって、それを象徴化する英雄的な人物は、その実在や業績が史実であるかどうかはべつとして、不可欠な存在といえる。したがって、ここでアルミニウスが国民的な英雄へと成長をとげる過程を多少なりとも概観しておくことがわれわれにとって有益となろう。

アルミニウスの名が中世の史料に言及されている痕跡はまったく認められない。したがって、この英雄は、中世人には馴染みのないものであったと考えてほぼまちがいなかりう。かれの名がふたたび見いだされるのは人文主義の時代なのである。宗教改革の時期にカトリック教会に抵抗して騎士戦争を組織した人文主義者ウルリッヒ・フォン・フッテンの著作のなかに、われわれはアルミニウスの名を発見することになる。その著作は、フッテンの没後、エアフルトの人文主義者エオバーヌス・ヘッススの手で編集され、1529年に公刊されたのだが、そのなかでフッテンはアルミニウスを解放戦士と表現している。じつに、およそ1400年ぶりのアルミニウスの復活である。これいこう、アルミニウスは文学で好んで取りあげられるテーマになり、アルミニウス物とでも呼ぶべきジャンルを形成することになった。作者によってアルミニウスの取りあげかたはさまざまであったが、ゲルマニアの解放・救済のシンボルという性格は時代をこえてつねに維持された。

つぎに、時代ごとのアルミニウス文学の特徴に一瞥を加えておくことにしよう。アルミニウスの復活にとって最大の功労者がフッテンであることはまちがいない。かれの『アルミニウス』と題する対話はふたつの目標を達成するために書かれている。ひとつはいうまでもなくドイツの過去を美化することであり、いまひとつは過去の文学作品を利用してローマという仇敵の正体を暴露することにあった。すなわち、フッテンはむかしのローマの背後に現在のローマを、アルミニウスの背後にルターないし将来の国民の解放者を見ていたわけである。このように、人文主義者にとって、解放されなければならない敵はまさしくローマにほかならなかった。さらに、フッテンのアルミニウスにかんしてきわめて興味ぶかい点は、タキトゥスのそれとの内容の相違である。タキトゥスのアルミニウスも祖国を統一して外圧を撃退する英雄であることにはかわりはない。しかし、タキトゥスはいっぽうで、権力の座を獲得したとたんその魔力に屈してしまう英雄の悲哀をも描いているのである。つまり、かれはこの題材をヒューマンなドラマに仕上げたといえる。これにたいして、フッテンは、タキトゥスの暗示するみずからの臣民にたいする利己的な野心という疑惑をアルミニウスから極力除去することにつとめた。かれは、アルミニウスが個人的な利益や栄光のためではなく、みずからの臣民の自由のためだけに闘ったのだという点を強調するのである。このため、フッテンは、最終的な英雄の墮落というという結末を、燃えさかる剣をもつ正義の人士、聖ゲオルクのモチーフに変更せざるをえな

かった。この変更を完全なものとするために、フッテンはローマにたいするアルミニウスの背信という非難をも論駁しなければならなかった。そのさい、かれはつぎのようなロジックを用いる。専制はけっして永続的な忠誠にあたしないし、それを保証もしない。好機に圧政にたいして蜂起することは自由人の権利であり、義務であり、名誉である。このように、フッテンは、タキトゥスの格調たかい文学性を犠牲にして、完全無欠の高潔な人間像を提示することをめざしたといえよう。これを歪曲と呼ぶことはできまい。ただ、ここで種族意識の核となる伝統の形成にさいして、過去の題材が取捨選択されて扱われているという点は注目しておいてよからう。そして、これいこうドイツにおける伝統形成にとって重要な役割を担うのは、タキトゥスのアルミニウスではなく、フッテンのそれなのである。

悲惨な三十年戦争（1618-48）はドイツにおどろくべき道徳的な頹廢、民衆の野蛮な行為や政治的な無気力をもたらした。それと同時に、漸次進行していた内的分裂がますます激化した。すなわち、三十年戦争後に流入した外来文化、とりわけフランス文化に感化された王侯、貴族の宮廷と従順な臣民の世界との文化的な懸隔がいっそう促進されたのである。このような風潮を背景として、学識者の文学サークルでは愛国的、倫理的な熱情が高揚した。かくして、アルミニウスもあらたな使命をおびて登場することになった。すなわち、道徳的な警告者という役割である。アルミニウスは、ゲルマン固有の資質と考えられていた素朴、誠実、中庸、それから国民的な伝統にたいする忠実な態度といった本質への回帰を主張する。また、アリオヴィストも、ゲルマン固有のものと考えられていた四つの主要な美德（勇気、男らしさ、誠実、忠誠）への回帰を公然と要求する。いっぽう、あたらしい話し方、流行、思考様式などは「ロマンス」welsch文化から借用された非ゲルマン的な要素で、ドイツ人には不自然なものとして片づけられた。では、当時の作家たちが古代の英雄に語らせた警告は、一般民衆の耳もとにも届いていたのであろうか。この点にかんしては、16、7世紀のアルミニウス物は、おおむねアカデミックなサークルの産物でしかなく、知識人層内部で流通したにすぎないという事実を確認しておきたい。つぎに18世紀を見てみることにしよう。

18世紀のドイツの文壇は二分されていた。ひとつはヨハン・クリストフ・ゴットシェトを中心とするアカデミックなグループであり、もうひとつは若き天才フリードリヒ・ゴットリープ・クロプシュトックの熱烈な支持者のグループである。前者は、バロック風の歪曲、誇張された傾向にたいしてドイツの演劇、文学、言語の革新を志し、詩学の法則とよき趣味とを尊重した。その点で、かれらはフランスの古典主義文学に範をとった。いっぽう、後者は、個人の体験や感情の自由に立脚したあたらしい国民的な文学を擁護し、ドイツの文化的な過去に遡及した。とりわけ、かれらは、窮屈な規則をもつ「ロマンス」様式からの解放を要求し、前者のグループとはげしく対立したのである。後者の代表的な人物として、クロプシュトックのほかにヨハン・エリアス・シュレーゲルの名を挙げることができる。シュレーゲルの戯曲『ヘルマ

ン』は、ドイツ人にはじめて完全版の国民的演劇を提供したものと評価されている。これは、クロプシュトックの三部作『ヘルマン』とともに、アルミニウス文学のいっそうの発展をもたらした。さらに、18世紀の世紀転換期、ナポレオン戦争の時期には、フランスの侵入者をゲルマーニアから追放できるあらたなアルミニウスを待望する機運がたかまり、かれは詩人たちによってゲルマーニアの解放戦士、反ナポレオン解放戦争のシンボルとして讃えられたのである。アルミニウス文学は、ドイツ最大の劇作家、小説家のひとりハインリヒ・フォン・クライストの愛国劇『ヘルマンの戦い』をもって最高潮に達する。こののちもアルミニウスを題材にした叙事詩、戯曲、小説は着実に増加しつづけるが、普及が進むにつれて、それはじゅうらいの深みを喪失することになった。この趨勢は1871年のドイツ帝国の樹立のころにクライマックスを迎える。トイトブルクの森にアルミニウスの記念碑が建立され、1875年にはその落成式が盛大に祝われた。ここでもういちど18世紀に立ちかえるならば、この時代はアルミニウス物が演劇やオペラをつうじて舞台上に登場し、以前の時代よりもいっそう流行の裾野をひろげた時期と考えてよからう<sup>14)</sup>。しかし、演劇やオペラを媒介とする普及にはやはり限界がある。この限界をこえてアルミニウスが真の国民的な英雄の地位を獲得するには、歴史小説が流行し、学校教育が整備される19世紀を待たなければならないが、それは次章の課題となろう。

- 1) この章とⅣ章の作成にあたっては、つぎの文献がおおいに参考になった。Klaus von See, *Deutsche Germanen-Ideologie*, Frankfurt (M) 1970. なお、村上淳一『ゲルマン法史における自由と誠実』（東大出版会、1980年）14—22ページには、同書にかんする詳細な紹介がある。
- 2) 以上のタキトゥスの発見にかんする説明は、つぎの文献を参照。C. W. Mendell, *Tacitus The Mann and His Work*, London 1957, p. 225-255.
- 3) 以下につづく、ドイツの人文主義者によるタキトゥスの受容については、Klaus von See, *a. a. O.*, S. 14f. なお、ピッコローミニ、ヴィンプフェリンク、ツェルティスの引用も同書によった。
- 4) C. W. Mendell, *op. cit.*, p. 287.
- 5) タキトゥス（泉井久之助訳註）『ゲルマーニア』岩波書店、1979年、235ページ。
- 6) Klaus von See, *a. a. O.*, S. 10.
- 7) 以下の純血理念にかんする叙述は、*Ebenda*, S. 15f. を参照した。なお、ペーベルの引用も同書による。
- 8) タキトゥス、前掲書、29、40-41ページ。
- 9) Klaus von See, *a. a. O.*, S. 16.
- 10) *Ebenda*, S. 24.
- 11) *Iordanis Romana et Getica*, IV §25, *MGH Scriptores Auctores Antiquissimi* 5, 1., hrsg. v., T. Mommsen, 1882, S. 60.  
*“Ex hac igitur Scanza insula quasi officina gentium aut certe velut vagina nationum eum rege suo nomine Berig Gothi quondam memorantur egressi :”*
- 12) W. Goffart, *Barbarians and Romans*, Princeton 1980, p. 20-22.
- 13) Klaus von See, *a. a. O.*, S. 29.

- 14) 以上のアルミニウス文学にかんする記述は、R. Kuehnemund, *Arminius or the Rise of a National Symbol in Literature*, New York 1966. を参照。

#### IV 膨脹・増殖する出自神話

19世紀は、歴史学が専門分化した人文・社会科学の一部門として自己主張を開始した時代である。歴史学とは、そもそも現象のうつろいゆく側面、すなわち変化の相を扱う学問にほかならない。しかし、うつろいゆく姿にばかり目を奪われていると、人はいいしれぬ無常感に襲われるものである。そこで、精神のバランスを維持するために時間を超越した不変な要素をよすがとしなければならなくなる。専門的な学として確立する以前の中世の歴史作家にとっては、キリスト教の普遍性がその役割を演じていたといえるであろう。しかし、キリスト教がもはや往時の力を失ってしまったいま、ドイツの歴史家たちはロマン主義者が強調した民族精神を歴史の定数として重視したのである。ロマン主義者は民族を、天然のままで人為の加わっていない、それ独自の発展法則にしたがう有機体と解した<sup>1)</sup>。このため、はるかかなたの古ゲルマンの時代が、ドイツ史のはじまりと位置づけられることになったのである。草創期のドイツの歴史家たちも、おおかれすくなかれこのような理念に支配されていた。こうした理解は、民族を歴史に拘束されない先天的な現象と捉える立場のなかでも、もっとも極端な見方といえよう。これにたいして、われわれは、民族をあくまでも人為的な歴史的形成物として捉える立場で臨んできた。どちらの姿勢がただしいかは、エスニシティ研究の専門家のあいだでも議論が分れるところであり、容易に判断を下すことはできない<sup>2)</sup>。ただし、ここであくまでも筆者の個人的な見解であることを断ったうえで述べさせていただくとすれば、民族を先天的なものとする立場にはやはり疑問を感じざるをえない。というのは、もし民族が先天的なものであるとするならば、それは人文科学の対象にはなりえないからである。人文科学の扱える対象はあくまでも人為的なものにかぎられる。それゆえ、そこに、生物学をはじめとする自然科学がこのテーマに接近する空白も生まれるてこざるをえない。しかし、われわれは、このテーマにおける人文科学と自然科学の提携がいったいなにをもたらしたのかを、ドイツの経験からじゅうぶんすぎるほど認識している。したがって、われわれは、民族を先天的なものとする立場を断じて避けなければならぬ。むしろ、民族の先天性を基盤に据えた歴史学は、民族を人為的なものとするわれわれの視点からは、二次文献としてではなく、一次史料として読まれなければならないのである。では、アカデミックな世界において、出自神話は近代いこうどのような発展を遂げたのであろうか。ひとことで述べるとすれば、近代は出自神話の膨脹の時代と名づけることができる。以下では、クラウス・フォン・ゼーの著作を案内役として、近代いこうの出自神話がたどった軌跡を具体的に説明することにしたい<sup>3)</sup>。

出自神話の膨張の第一の局面は、近世に端を発した拡張のいっそうの発展というかたちをとった。すなわち、北欧世界のゲルマン＝イデオロギーへの吸収である。この点でもっともおおきな貢献をなしたのは、ヘルダーとかれいこうのドイツのロマン主義者たちであった。かれらの努力で、スカンディナヴィアの伝承は、当のスカンディナヴィア人だけでなくドイツ人もそれに属するところの民族精神の表現であるという理念が定着した。ヤーコプとヴィルヘルムのグリム兄弟やカール・ミュレンホッフのそろそろの著作は、このような精神に貫かれている。そして、これらは史料的な豊饒性のゆえに、こんにちでもドイツのゲルマン学の重要な基礎になっている。ともかく、ロマン主義の時代とともに、かつてデンマークの文学史家カール・ロースが指摘した「ドイツの精神生活における北方の夢」と呼ばれる事態がはじまるのである。スカンディナヴィアは名実ともにゲルマン精神の「兵器庫」となった<sup>4)</sup>。

19世紀のすえには、この「北方の夢」をいっそう発展させることになるいくつかのキー・ワードが確立した。「北方人」Nordländer, 「北方」Norden, 「北方的」nordischといった概念である。これらの概念の定着に最大の貢献をなしたのはニーチェであろう。むろん、それらはニーチェのオリジナルというわけではない。しかし、それに新鮮な生命を吹きこみ、たんに地理的な概念であったものを世界観的な概念に仕上げたのは、ほかならぬニーチェであった。ニーチェの真意はともかく、これらの概念は、フーストン・スチュアート・チェンバレンやエルンスト・ベルトラムらをへて、アルフレット・ローゼンベルクやナチスの世界観唱導者にいたる危険にみちた発展をとげることになる<sup>5)</sup>。ニーチェいこうの北方人イデオログたちの脳裏には、ローマに代表されると考えられた世界にたいする嫌悪が存した。たとえば、チェンバレンはその主著『19世紀の基礎』のなかでつぎのように語っている。

ローマにたいする本能的な拒絶という点ほど、スラヴーケルトーゲルマン精神の有機的な統一をみごとに証明してくれるものはない。

かれにあっては、スラヴーケルトーゲルマンは北方諸族 Nordvölker と同義語なのである<sup>6)</sup>。

つぎに、膨張する出自神話の第二の局面として注目しなければならないのが、アーリア人学説の登場である。この学説の起源は18世紀末のイギリスにさかのぼる。当時、イギリスはインドの植民地化を着々と進めつつあった。その過程で、インドの古典文献がイギリスの文献学者・言語学者の目にとまった。かれらは、古代インドの言語にヨーロッパ諸言語との類似性が確認されたと信じたのである。こうして、ヨーロッパの諸民族、インド、さらにはペルシアが単一の語族に分類されることになった。このように、アーリア人学説は、その出発点においては純粹に言語学上の問題だったのである。だが、それはながく言語学の領域にとどまるものではなかった。そもそも、言語学には諸言語の類似性を説明するためのふたつのこととなる理論が存



在する。ひとつは系統樹説 Stammbaumtheorie, もうひとつは波動説 Wellentheorie と呼ばれるものである。前者は共通の祖語 Ursprache が分岐して現在の諸言語にいたったとする見方で、いっぽう後者はことなる言語が地理的な接触によってじょじょに接近していくという見方である。前者の理論を支持するならば、共通の祖語を話す原民族 Urvolk, さらにかれらの原郷 Urheimat を必然的に措定しなければならない。かくして、アーリア人学説は人種論に転化したのである。この学説は、19世紀になるとマックス・ミュラーを介してドイツにも伝播する。それいご、ドイツにおいてもおおくの研究者がこの学説の確立に関与することになり、インド＝ゲルマン学なる部門の誕生をみた<sup>7)</sup>。

しかし、インド＝ゲルマン研究には発足当初から批判もすくなくはなかった。たとえば、すでにふれた言語伝播にかんする波動説を支持するならば、そもそも共通の祖語・原民族・原郷の存在を想定する必要はない。近年、津田元一郎氏がアーリア人学説にたいするきわめて興味ぶかい批判の書を世に問われた。そのなかで、氏は、インドやペルシアの古典文献に登場するアーリアンなる用語にはもともと人種的なニュアンスは含まれていなかったことを、インド人研究者自身の古典解釈に依拠しながら強調する。むしろ、それを特定の人種と同一視するのは、ヨーロッパの文献学者のかなり恣意的な誤読の賜物であったとする。また、この分野において比較言語学がもたらしたとされる成果にかんしても、その例はじつにすくないということが指摘されている<sup>8)</sup>。さらに、この学説の最大の泣きどころとして、アーリア人の原郷を確定するにたる考古学的な発掘が、いまだになんらもたらされていないということを挙げておくべきであろう。一般的には、中央アジアのステップ地帯のどこかに原郷が存在したと考えられているようである。しかし、管見のかぎりでは、ドイツのインド＝ゲルマン学者で、この中央アジア説を支持する者はまったくといっていいほどない。かれらはおおむね、インド＝ゲルマンの原郷は、北方、すなわちスカンディナヴィアかバルト海沿岸にあったと考えている。われわれは、ここに、さきに述べた北方イデオロギーの鮮明な反映を見るとともに、アーリア人学説の学問的とはみなしがたいイデオロギー的な性格をも垣間見るのである。筆者は津田氏の批判は正鵠を射たものであると考える。ただし、そうだとすると、ひとつの疑問が残る。では、なぜ、これほど根拠の薄弱な学説がおおぜいの学者を魅了することができたのであろうか。われわれの関心にそってこれを言いかえるならば、なぜわざわざゲルマンをインド＝ゲルマンに拡張しなければならなかったのか、ということになろう。この点にかんして、われわれが導きの糸としてきたクラウス・フォン・ゼーはなんら答えを与えてはくれない。また、筆者にもいまこの問題に答えるだけの準備はない。それゆえ、これはこんごの課題にさせていただきたいと思うのであるが、ここでは、クラウス・フォン・ゼーの著作にしたがって、アーリア人学説登場後の出自神話の膨脹の過程を振りかえっておくことにしたい。

インド＝ヨーロッパ概念の誕生後、それがただちに出自神話の玉座についたわけではなかつ

た。インド＝ヨーロッパの存在を受容するということは、ゲルマニストにとって不倶戴天の敵であったローマをゲルマンの同族と認めることを意味した。このため、19世紀をつうじて出自神話という点で重要な地位を占めたのは、あくまでもゲルマン人ないし北方人イデオロギーであった。このゲルマン＝イデオロギーの膨張の第二の局面は、第一次世界大戦後に出現する。それはまず、初期のギリシア精神の担い手であったドーリア人をゲルマン人の同胞とすることによってはじまった。この転換をもっとも明瞭に示しているのが、エルンスト・ベルトラムの著書『ノルネの書』である。しかし、内容の紹介にはいるまえに、ここで第一次大戦後のドイツの精神状況を振りかえっておくことが、その理解のためにも有益となろう。

1918年の敗戦をめぐる論争やあらたに流入した民主主義の機械的、算術的、平等主義的な原理にたいする敵愾心は、文字どおりのゲルマン＝ルネサンスを引きおこした。すなわち、政治的な孤立に直面して民族的な再生を独力でめざすゲルマン＝イデオロギーが台頭したのである。いわゆる「連続性という問題」Kontinuitätsproblemが、あらたな国民的自己認識をもとめる努力の一部として、学問の視野に登場することになった。文化連続は、ある民族から他の民族への文化遺産の移転から生じるものなのか、そうではなく民族の特質への孤立主義的な固執から生じるものなのか、という問題が真剣に議論されたのである。言いかえるならば、これは、外来の要素の吸収を重視すべきなのか、そうではなく独自の要素の保存を重視すべきなのか、という問題になる。文化連続の問題をめぐる学問的論争の口火を切ったのは、アルフォンス・ドブシュの『カエサルからカール大帝までのヨーロッパの文化発展の経済的、社会的な基礎』（2巻、1918/20年）である。この著作のなかで、ドブシュは、ゲルマン人の中・南欧世界への侵入が文化的な破局をもたらしたとする見解を否定し、逆にゲルマン人がおおくの点で古代文化の成果を継承・発展させたということを立証しようとした。すなわち、ドブシュは、民族という担い手がかわっても文化は不変であるという観点に立っていたことになる。これは、前述した文化連続をある民族から他の民族への文化遺産の移転と考える立場にほかならない。この理論は、じゅうらいの蛮族観に反駁する場面ではゲルマン人の歴史上の名声をたかめることにおおいに寄与したにちがいないが、当時の文化政策のなかでは基本的に歓迎されるものではなかった。ドブシュの文化連続の理論では、ゲルマン人はローマからその文化を継受したことになる。これは、もとよりゲルマニストの許容するところではなかった<sup>9)</sup>。

このような弊をまぬがれ、「ドイツ古代の可能性」Möglichkeiten deutscher Klassikをローマとの関係のかたに設定しようとしたのが、北方の血の崇拜者エルンスト・ベルトラムであった。きめのあらい人種生物学的な特徴を備えたかれの主著『ノルネの書』は、尖鋭な反ローマ的姿勢に貫かれている。かれは、ローマの西欧の人文主義とかれが呼ぶものに論戦を挑むのである。さらに、「血の保存」をつよく訴え、血の忘却を猥褻行為と断じてもいる。かれにとって、ドイツの民族精神、すなわち「深刻な危機に瀕している北方の血」が避けなければなら

ないことは、「末期ギリシア精神の血の運命」であるとされる。では、かれは「ドイツ古代の可能性」をどこに求めているのであろうか。この点で、かれの立場は首尾一貫している。かれは、ローマとドイツを結びつける文化継受の理念を放棄し、初期のギリシア精神、すなわち「ドーリア的な初期世界」を北方＝ドイツ的な要素とつよく結びつけることに「ドイツ古代の可能性」を見いだしたのである。このため、ギリシア人とゲルマン人は「インド＝ゲルマンの同胞民族」とされるにいたった。ただし、いっぽうは血の保存を怠ったために没落したと説明された。かくして、「これらの民族のいっぽうの初期世界」から「他方の初期世界」を推量することが可能になった。「ドイツ古代の可能性」をめぐるベルトラムの議論は、出自神話の初期ギリシア世界への拡張と純血イデオロギーの強調とにいきついたのである<sup>10)</sup>。

ワイマール共和国につづく第三帝国の時代に、出自神話の膨脹は最終局面を迎えた。第二次世界大戦のはじまるすこしまえから、そして大戦中、インド＝ゲルマン理念がふたたび文化政策の綱領になった。しかも、こんかいは、ゲルマニストにとってながらく仇敵であったローマが、ゲルマン＝イデオロギーに吸収されたのである。じゅうらいのローマとゲルマンの対立図式を解消させ、新機軸の設定を要求したのはここでも現実の政治状況であった。すなわち、ドイツのナチズムとイタリアのファシズムの提携、いわゆるベルリン＝ローマ枢軸の進展がこれにはほかならない。ギリシアの英雄理念やスパルタの共同体規律につづいて、いまやローマの美德もゲルマンの美德と同等に扱われることになった。結びつける要因として挙げられたのは、これらすべての民族がインド＝ゲルマン人であるという理由であった。このため、ナチ時代にはインド＝ゲルマン研究が活況を呈した。インド＝ゲルマン研究はそもそもの出発から人種学的な視点のもとで推進されていたので、それは親衛隊の帝国指導者ハインリヒ・ヒムラーと「祖先の遺産」Ahnenerbe 財団の特別な庇護下におかれた。また、1940年にはインド＝ゲルマン精神史研究所も創設されている。では、ローマはいかなるかたちでゲルマン＝イデオロギーに吸収されたのであろうか。つぎに、この点を具体的に振りかえってみることにしよう。

ミュンヘン大学のインド＝ゲルマン学の正教授ヴァルター・ヴェストが「祖先の遺産」財団の会長ハインリヒ・ヒムラーに献呈した『インド＝ゲルマン的な信仰告白』（1942年）には、ナチスの世界観の全体像が示されていて興味ぶかい。そのなかから、ここでの関心にかかわる箇所を摘出してみることにしよう。ヴェストも、たいはんのドイツのインド＝ゲルマニストとおなじく、インド＝ゲルマンの故郷が北ヨーロッパにあったという説を支持する。したがって、かれにとって「インド＝ゲルマン的」と「北方的」という概念は同義なのである。では、ドイツ人はインド＝ゲルマン人のなかに埋没してしまうのかというと、けっしてそうではない。この点で他の同胞たちと一線を画するのが純血理念なのである。「民族の混淆」は「墮落」であり、それは同時に「脱北方化」にはほかならない。ギリシア人とイラン人は「北方的な痕跡」をおおはばに喪失してしまった。いっぽう、「イタリア人のばあいはドイツ人とおなじく、民族

的な再生だけが、ぎりぎりのところでもっとも憂慮すべき脅威を阻止しうるであろう。」ここには、当時の政治情勢にたいする配慮が色こく反映しているといえよう。また、出自意識の膨脹が過去の歴史的な事件の解釈に影を落している例も見られる。第二次大戦の末期、ヨーゼフ・フォークトの編集でドイツの古代史家が『ローマとカルタゴ』（1943年）と題する論集を出版した。そのなかで、カルタゴが意味するところは、現代の金権政治、ユダヤ精神によって支配される商人民族とされるイギリスにはかならない。いっぽう、ローマが意味するところは、かつてのフェニキア人にたいするローマ人のように、全力を振りしぼって最後の勝利を獲得するであろうドイツとイタリアのインド＝ゲルマン人なのである。これまで、ローマは、ゲルマン的な美德にたいする仮想敵の役割を与えられつづけてきた。世界大戦の進行につれて、そのローマが、いまやゲルマン的な美德を共有する一員として迎えられるにいたったのである。これいご、ローマの悪徳にかんするじゅうらいの常套句は、ユダヤ人に集中的に浴びせられることになる<sup>11)</sup>。

以上で、われわれは、近代の出自神話の特徴のひとつである出自意識の膨脹の過程を振りかえった。ここで、その要点をかんたんにまとめておこう。古代のゲルマン人を祖先とみなす近世に誕生した出自神話は、北欧の文化遺産の発見にともなってまずは北に向って拡張した。ニーチェいこう、両者を合一する「北方人」なる概念が定着をみるのである。19世紀中葉には、ドイツにもアーリア人学説が波及したが、それはすぐに確たる地歩を築いたわけではなかった。文化連続という問題が真剣に議論されたワイマール時代になってギリシアが、それからイタリアとの提携を推進した第三帝国のもとでローマが、ようやくインド＝ゲルマンの同胞としてあらたに出自意識のなかに組みこまれたのである。かくして、出自神話の膨脹は学問的な根拠にもとづいてなされたというよりも、むしろ、それは現実の政治情勢や文化政策上の理由におおいに左右されていたことがあきらかになった。ただし、以上の分析はあくまでもアカデミックな世界における変化にすぎない。筆者は、すでに近世の出自神話を扱ったところで、それが近代いぜんのメディアをつうじて浸透する範囲はごくかぎられた社会層でしかなかったことを指摘しておいた。そのさい、出自神話が広範な社会層に普及する可能性が開けるのは、歴史小説が流行し、学校教育が整備される近代を待たなければならないことをもあわせて示唆しておいた。以下では、学校教育の場で出自神話がいかに扱われていたのかを検討することによって、近代の出自神話の第二の特徴である出自神話の増殖という側面にアプローチすることにしたい。

近代いこうの国民統合の過程で、中等教育のはたした役割ははかりしれない。しかし、教育制度は一朝一夕で誕生したわけではない。したがって、ほんらいならばわれわれは、学校教育の整備といった制度史的な側面、さらには教師の質や就学率の問題といった社会史的な側面から議論をはじめべきであろうが、ここではそれはしない<sup>12)</sup>。むしろ、われわれの関心からは、

それぞれの時代の教材に出自神話がどのようなかたちであられるのか、さらにそれはすでに見たアカデミックな世界における変化といかなる関係にあるのかが問題となろう。ここでは、各時期の代表的な中等教育用の歴史教材を取りあげ、出自意識にかかわる部分を検討することによって、この課題と取りくむことにしたい<sup>13)</sup>。

まず、最初に取りあげるのは、1860年にライプツィヒで出版されたカール・フリードリヒ・ヘンペルの編になる『民衆学校の友 読み、考え、覚えるための補助教材』である<sup>14)</sup>。全体で9の部分からなるこの教材の第6部が、いわゆる世界史に相当する内容となっており、「普遍的な世界史の簡潔な概略」という表題が付されている。いま、われわれの考察にとって重要なのは、第2章の「キリスト生誕から現在にいたるあたらしい歴史」である。そのなでも、15節の「ドイツ人ないしゲルマン人（軍人ないし戦士）」が必要となる。ここでの考察にかかわる部分をいくつか抜粋してみることにしよう。まず、この節は以下のような文章ではじまっている。

ローマ人は、ゲルマン人という概念で（ローマ人のなかでも、とりわけユリウス・カエサルとタキトゥスがゲルマン人にかんする報告を残している）、同族のデンマーク人、スウェーデン人、その他の北方人 Nordländer をもいぜんとして理解していた。また、ドイツ人は、かれらの国民的な神であるトイト Teut ないしトゥイスコン Thuisikon にちなんで、チュートン人 Teutonen とも呼ばれた。

ここで注目しておきたいことは、古代のゲルマン人と現在のドイツ人というふたつの概念が、特別な説明もなしにはほぼ同義で使用されているという点である。つまり、ゲルマン人を祖先とする出自神話は、教化すべき対象というよりも、すでに暗黙の了解事項として扱われている印象を受ける。つぎに、ドイツ人の性格にかんする説明に目を向けてみることにしよう。

かれら（ドイツ人）は森のなかの泉のほとりにすすんで定住した。まとまりのある村落と都市はキリスト生誕後の時期にようやく成立した。都市は監獄 Gefängnisse とみなされ、そこにすすんで移り住む者はなかった。純潔 Keuschheit は女性の美德で、勇気 Tapferkeit は男性の誇りであった。…。古ドイツ人の誠実 Ehrlichkeit や実直 Auflichtigkeit はことわざになった。すなわち、男子の一言 Ein Wort ein Mann である（補足は筆者）。

ここには、『ゲルマニア』の発見いこう、ドイツの人文主義者がその解釈から引きだしたゲルマン＝イデオロギーが濃縮されていて興味ぶかい。このように、19世紀中葉の歴史教科書のなかの出自神話は、おおむねタキトゥスの叙述を土台にして構成された出自意識の枠内にとどまっていた。拡張が見られるとしてもそれは北欧までであった。

ヴァルハラ（北欧神話でオーディンが戦死者たちを迎える天堂）が死後の生活の場所であった（補足は筆者）。

そして、この傾向はつづくビスマルク時代、第二帝政、ワイマール共和国の時期をつうじて継続されるのである。また、この期間をつうじて、アルミニウス（ヘルマン）のエピソードが、ドイツの救済者という表題で掲載されていることも付けくわえておくべきであろう。

ナチ時代になると、歴史教科書のなかの出自神話にあきらかな変化があらわれる。われわれは、ナチ時代の代表的な教材である『カーンマイヤーとシュルツェ 専門知識の書』を取りあげ、この変化を確認することにしよう<sup>15)</sup>。このテキストには歴史、地理学、発生学、物理学、化学、鉱物学が含まれる。歴史はこれらのうちで最初におかれており、表題は「ドイツ史」となっている。全体で17の章からなるこの「ドイツ史」のなかで、われわれの関心にとっては、第1章の「原始時代と先史時代」、第2章の「ゲルマン人とローマ人」が必要となる。とりわけ、出自意識という観点から見ると、第1章・第2節の「先史時代のゲルマン人（B.C. 2000ごろ—B.C. 100ごろ）」が重要である。この部分には、ナチ時代の歴史教科書に見られる出自神話がきわめてコンパクトに要約されていて興味ぶかい。したがって、多少ながくなることは覚悟のうえで、必要な箇所を紹介してみることにしよう。

1. インド＝ゲルマン人 言語学者は、たいていのヨーロッパの諸民族、さらにはペルシア人やインド人までもがおおくの語幹を共有しているということを発見した。たとえば、父、母、姉妹、車軸、海、小舟、耕地、大麦などがそうである。あきらかにかれらの言語には類縁関係がある。このため、これらすべての民族はインド＝ゲルマン人と呼ばれるひとつの原民族 *Urvolk* に起源をもつという結論が引きだされた。インド＝ゲルマン人の故郷はわが大陸の北部と北東部に求められる。諸部族が新石器時代になってますます増殖するにつれて、若干がそこから離れ、数百年・数千年の経過のなかで南・西欧、それどころかペルシア、インドにも拡散した。北方人 *Nordische Menschen* はギリシアの地で壮大なギリシア文化を創造し、北方的なイタリア人 *Nordische Italiker* はローマ帝国を構築した。北欧にはゲルマン人とケルト人がとどまった。これらすべての種族が体格や精神的な資質という点でこんにちもおおむね均質であるということが、かれらに類縁関係があるという見解を立証する。インド＝ゲルマン人は長身、長頭、金髪の人種であった。かれらはもっとも高度でもっともゆたかな文化をもたらし、ヨーロッパにおいてはギリシアやローマにまで、また前部アジアにも拡散した。

アカデミックな世界で確認された出自神話の膨脹という事態は、学校教育の場にも姿をあらわ

したのである。かくして、ギリシア文化は北方人の遺産とされ、ローマ帝国の誕生も北方人の功績とされるにいたった。では、ローマの支配層が北方人に組みこまれたことによって、ローマ人とゲルマン人の関係をめぐる叙述はどのように変化したのであろうか。

2. ゲルマン人の居住地　ゲルマン人は、歴史の舞台に登場したころにはまだ粗野で無知な野蛮人であって、洞穴や地面の穴に群れをなして暮らしており、動物の毛皮に身を包んでいたかのようにしばしば描かれる。そのご、他民族、とりわけローマ人との交流がかれらによりたかい教養をもたらしたかのように。それはまちがいである。ゲルマン人は、歴史時代のずっとまえから、すなわちかれらが南の諸民族と接触するいぜんから、農耕牧畜の民、すなわち農民民族 Bauernvolk であった。かれらはけっして群れをなして放浪した遊牧民ではなかった。

われわれは、ここにローマにたいする伝統的なコンプレックスが生きつづけているのを垣間見ることができる。さきに引用した「1. インド＝ゲルマン人」ではいったん膨脹したかにみえた出自意識が、ここでは伝統的なローマとゲルマンの対立の構図の背景に後退しているのである。この点をさらに鮮明にするために、第2章・第3節の「ローマ帝政期のゲルマン人」から必要な箇所を可能なかぎり紹介してみることにしよう。「1. ゲルマニア」につづく部分にはつぎのような説明がある。

2. その住民　ゲルマン人の肉体面、精神面の特徴はローマ人にふかい感銘を与えた。かれらの報告や彫刻からは、ゲルマン人が高貴な姿と傑出した資質を有する農民族であり、長頭、碧眼で、ブロンドの、ときには赤い頭髪を備えていたことがあきらかになる。…。自由なゲルマン人は英雄的な戦闘を好み、盾と剣を誇った。そして、すすんで狩に出かけた。男はつねに集団で猛獣に立ちむかい、勇気 Mut・機敏 Gewandtheit・精力 Kraft を証明しなければならなかった。ゲルマン人は誠実かつ正直であった *treu und wahr*。交渉のさいには、敵をも信頼してしまい、しばしばロマンス的な策略や虚偽 *welsche List und Falschheit* に敗れた。

勇気・機敏・精力・誠実・正直は、ゲルマンの美德を語るさいの伝統的な常套句であり、いっぽう策略や虚偽はローマ的な悪徳の代名詞であった。ここで注目すべきことは、出自意識が同一の教材のなかでその境界を伸縮自在にかえている点である。変更にさいしては、みずからの自尊心をたかめることが最大限に尊重されている。ローマ帝国の構築は、インド＝ゲルマン研究の成果(?)を基礎として北方人の手柄に帰せられる。いっぽう、有史いらいのローマとゲ

ルマンの対立にかんする叙述にあたっては、ゲルマンの美德と考えられてきたものが称揚される。ここでも、われわれは伝統が取捨選択されているのを見る。そのさい、中心的な地位を占めるのは、より古い伝統、すなわちゲルマン人ないし北方人イデオロギーにほかならない。

近代の出自神話のひとつの特徴はその増殖という点にある。前近代にはそのイデオロギーにふれることすらなかったであろう社会層にも、いまや学校教育というメディアをつうじて出自意識を供給する道が開けたのである。しかし、そこからすぐさま出自神話が国民全体の共有する信条になったと主張することはできまい。この点を考察するためにはべつの分析手続きが必要となろう。ただし、それが教育というメディアをつうじて国民全体の共有する知識になったと主張することはできよう。そして、その知識は、なんらかの契機があれば信仰に転化することもありえたのである。冒頭に挙げたヴェーバーの定義に見られる出自信仰を核とする種族が、おおきく完成にちかづいたといえるであろう。この種族意識は、ナチ体制のもとで極限に達し、内にたいしてはヒステリックな反ユダヤ主義、外にたいしては世界制覇の野望というかたちをとるにいたった。かくして、ナチの支配は、戦後のドイツにはかりしれない負の遺産を残し、1945年に破局を迎えたのである。

- 1) ドイツ＝ロマン主義の民族理解については、Klaus von See, *a. a. O.*, S. 22f. を参照。
- 2) とりあえず、李光一の前掲論文を挙げておく。
- 3) この章の記述も基本的に Klaus von See の前掲書にもとづいて進めるが、ほかに以下の文献をも参照。G. L. Mosse, *The Crisis of German Ideology*, London 1964; F. スターン（中道寿一訳）『文化的絶望の政治』三嶺書房、1988年。なお、モッセの前掲書については、野田宣雄『教養市民層からナチズムへ』（名大出版会、1988年）52ページ以下に紹介がある。
- 4) Klaus von See, *a. a. O.*, S. 35f.
- 5) *Ebenda*, S. 55.
- 6) *Ebenda*, S. 61f. なお、チェンバレンの引用は同書による。
- 7) アーリア人学説については、ひとまず A. Scherer (hrsg. v.), *Die Urheimat der Indogermanen*, Darmstadt 1968. 所収の諸論稿を参照した。
- 8) 津田元一郎『アーリアンとは何か』人文書院、1990年。
- 9) Klaus von See, *a. a. O.*, S. 73. また、ドブシュの学説については、藤縄謙三他編『西洋の歴史〔古代・中世編〕』（ミネルヴァ書房、1988年）所収の平城照介氏の論稿（180—81ページ）をもあわせて参照した。
- 10) エルンスト・ベルトラムについては、*Ebenda*, S. 88f.
- 11) ナチ時代の出自神話については、*Ebenda*, S. 97-101.
- 12) このような観点からの教育史として、M. クラウル（望田幸男他訳）『ドイツ・ギムナジウム200年史 エリート養成の社会史』ミネルヴァ書房、1986年; R. ベリング（望田他訳）『歴史のなかの教師たち—ドイツ教員社会史—』ミネルヴァ書房、1987年。
- 13) 各時期の代表的な歴史教材の選別にかんしては、ゲオルク＝エッカート国際教育研究所のギゼラ＝タイストラー女史の御教示を受けることができた。
- 14) C. F. Hempel (hrsg. v.), *Der Volksschulenfreund, ein Hilfsbuch zum Lesen, Denken und Ler-*



nen 42Aufl., Leipzig 1860.

15) *Kahn Meyer und Schulze Realienbuch Aufgabe A*, Bielefeld u. Leipzig 1938.

## V 出自神話でみる戦後

では、戦後のドイツはこの負の遺産をどのように受けとめ、いかなる方針をもってそれに対処しているのだろうか。ここでは、出自神話という指標にそって、この問題を考えてみることにしたい。

すでに、われわれは、近代いこうの出自神話の普及が歴史教育の場においてアカデミックな世界と並行するかたちで進められていたことを、具体的に教科書の内容を分析することによってあきらかにしておいた。では、戦後改革はこの動向にいかなる変更をもたらしたのか。いいかえるならば、戦後の歴史教育のなかで、出自神話はどのような処遇を受けているのであろうか。終戦後のドイツでは、おなじ敗戦国である日本のばあいとはことなり、占領軍によって歴史教育が停止されることはなかった。ドイツ人はただちに歴史教育の再建に着手した。そのさい、比較的神話性がうすいと考えられたワイマール期の教材が、とりあえず使用されたのである。そして、そのあいだにも独自の教科書の作成が着々と進められた。作成にあたって、もっとも配慮がなされたのは神話色の排除という点であった<sup>1)</sup>。ここで、現在の代表的な歴史教材であるヴェスターマン社発行の『過去への旅』第1巻を取りあげ、そのなかで出自神話がいかに関われているのかを検討しておくことにしよう<sup>2)</sup>。4つの巻からなるこの教材のなかで、われわれの関心にとって重要なのは太古からフランク王国までを扱う第1巻である。なかでも、第9章の「ゲルマン人とローマ人」が分析の対象となる。まず、この教材を一読して気がつくことは、古代のゲルマン人と現在のドイツ人を結びつけるようないかなる記述も見られないということである。さらに、タキトゥスの一節を紹介するかたちでゲルマン人の生活を伝える部分もあるが、そこでも戦前のゲルマン＝イデオロギーにつながる可能性を秘める箇所引用は慎重に回避されている。なによりも、そこには主観的な解釈がまったく混入していない。したがって、ゲルマン的な美德やローマ的な悪徳にかんするいぜんの常套句もやはりいっさい見られないのである。それから、「ローマ人とゲルマン人の出会い」という箇所では、紀元9年のトイトブルクの戦いに言及がなされている。われわれは、ワイマール期にいたるまで、アルミニウスが歴史教材のなかでドイツの救済者として扱われていたことをすでに指摘しておいた。これはナチ時代にもかわりはない。これにたいして、「ローマ人とゲルマン人の出会い」にはアルミニウスの名前は登場しない。ながらくドイツ愛国主義のシンボリックな存在であったアルミニウスが、ついに舞台から姿を消したのである。このように、ドイツの歴史教育は、戦前の、いやより正確には19世紀いらいのイデオロギー的な偏向を着実に払拭しつつあるといえよう。

また、それを自主的に進めてきたということはたかく評価されてしかるべきであろう。では、アカデミックな世界はどうか。

筆者の携わっている中世国制史研究の領域を見るかぎり、残念ながら出自神話の払拭は遅々として進んでいないといわねばなるまい。ここでは、戦後のドイツ中世史学界の重鎮のひとりであるカール・ボーズルの論説「ドイツ中世におけるゲルマン的な連続（貴族—国王—教会）」（1962）を取りあげ、その問題関心の所在を吟味することによって、この分野における旧西ドイツ史学界の停滞性を確認しておくことにしたい<sup>1)</sup>。ボーズルは、「I. 文化 連続性と文化の不変性」において、この論稿の目標をあきらかにしている。かれは、まず、文化の連続 *Kontinuität* という概念にはふたつの側面があるという。ひとつは、ドプシュとかれの学派が使用したように、ある文化集団からべつの文化集団への文化の転移を指す場合である。この意味では、文化の担い手よりも文化そのものの連続が問題となる。これと明確に区別するために、いまひとつの側面にボーズルは文化の不変性 *Kulturkonstanz* なる概念を与えている。そして、「この概念は、物質的な基礎の変化にもかかわらず、歴史的な環境が交代しても自立的な諸形態が保存される場合を指す。」という。つまり、ここでは担い手の特性が文化と同義に扱われるのである。そして、かれは後者の意味をも連続性という概念のもとで把握し、そこからつぎのような帰結にいたる。

かくして、連続性とは、文化を継承する民族の資質を強化することも弱体化することもある文化転移でもあるし、外来の影響にたいして民族共同体、社会集団、文化集団の文化的な特徴を維持する力でもある。

ボーズルが「ドイツ中世におけるゲルマン的な連続」というばあいには、問題となっているのは後者の意味なのである。では、この主題を扱う意義はどこに求められているのか。

継承する民族の個性や真価が認識されてはじめて文化移転の程度や本質が理解される。

このように、かれは外来の影響を無視しているわけではない。ただし、それを理解するためには、継承する民族の個性や真価を認識しておかなければならないというのである。かれにあっては、ここにゲルマン的な連続性を扱う意義がある。

かくして、全ゲルマンの外来の影響との関連や対立の認識が、ドイツやヨーロッパの中世の社会集団・文化集団にかんする研究の主要な関心たりうる。ヨーロッパ文化は強固なゲル

マン的構成因子をも内包するのである<sup>4)</sup>。

ボーズルは、つづくⅡ～Ⅴで、みずからがゲルマン的な構成因子と考えるものを具体的に提示するのであるが、ここではそれにはふれない。むしろ、ここで問題としなければならないのは、かれに代表される歴史観の有用性なのである。すでに、われわれは、中世人の歴史意識には「ゲルマン」なる観念が問題とはなりえないほど希薄であったことを指摘しておいた。さらに、この観念が復活するのは、タキトゥスの『ゲルマーニア』が発見される近世いこうであることをもあわせて確認済みである。「ゲルマン的」なる観念のなかった時代に「ゲルマン的」なるものを捜しもとめる行為。しかも、「ゲルマン的」なる概念は、すくなくともかつては多分にイデオロギー的な潤色を含んでいた概念なのである。以上の背景を念頭におくならば、このような姿勢は出自イデオロギーの再版をめざす以外のなにものでもあるまい。かくして、ボーズルの問題設定は、かれがそのことを意識しているかどうかはべつとして、出発点においてすでに出自イデオロギーの再燃に寄与しかねない危険性ははらんでいるのである。ここで、このような歴史観のもつ問題性をより明確に認識するために、イギリスの経済・社会史家エリック・ホブズボームの言葉を想起しておくのが有益かもしれない。かれは、『創られた伝統』(1983)と題する共同論集で序論(タイトルは「伝統は創り出される」)を担当し<sup>5)</sup>、そのなかでつぎのように語っている。

「伝統」とはながい年月をへたものと思われ、そう言われているものであるが、その実おうおうにしてごく最近成立したり、またときには捏造されたりしたものもある<sup>6)</sup>。

また、べつの箇所ではつぎのように語られる。

しかしながら、歴史的な過去へのそうした言及があるばあいであっても、「創り出された」伝統の特殊性とは、歴史的な過去との連続性がおおかた架空のものだということである<sup>7)</sup>。

われわれが振りかえったゲルマン＝イデオロギーも、おおかたこの創られた伝統に属するとはいえないまいか。そして、われわれがここでとくに注目しなければならないのは、歴史家が伝統の創出を研究することの意義として、ホブズボームが二番目に挙げている理由なのである。

第二に、それは人間の過去とのつながり、そして歴史家自身の主題と手仕事にそうとうの光をあてることになる。というのは、創り出された伝統が、歴史を可能なかぎり活動の正当化の担い手および集団の結合の凝固剤として用いるからである<sup>8)</sup>。

しかも、集団が国民や国家であるばあいには、とくに創出の要素が明瞭になる。

というのは、知識の基礎あるいは国民（ネーション）、国家（ステイト）ないし運動のイデオロギーの一部となった歴史は、じっさいに民衆の記憶に貯えられたものではなく、その役割を担った人びとによって取捨選択され、書かれ、描かれ、通俗化され、そして制度化されたものだからである<sup>9)</sup>。

そして、かれは第二の理由をつぎのような文章で締めくくっている。

にもかかわらず、目的がほかにどうであれ、専門家の探究の世界だけではなく、政治的存在としての人間の公的領域にも属している過去のイメージを分解したり、再構築したりすることによって創造に寄与するかぎり、意識的にせよそうでないにせよ、歴史家はすべてこの過程（伝統の創出）に携わっている。歴史家がみずからの活動のこうした次元に意識的であつたらよいのだが（補足は筆者）<sup>10)</sup>。

では、さきに紹介したボーズルの論説では、出自イデオロギーの再生への寄与は無意識のうちになされているのであろうか。筆者にはかならずしもそうとは思えないのである。ふたたびボーズルから引用してみることにしよう。

この論述が、（キリスト教の）反キリスト教的な遺産との対立ののちも、キリスト教的な中世にゲルマン的な本質がどれほど強く生きつづけていたのかを示すことができれば、それどころかゲルマン的な本質がフランスやイギリスの中世とはまったくことなる道へドイツ中世を導いたことを—これは支配と国家という観点からもっとも適切に証明される—示すことができれば、それは文化統合の弁証法的なプロセスにおける慣性の程度を普遍的に認識することにも寄与することになる（補足は筆者）<sup>11)</sup>。

ボーズルの射程には、フランスやイギリスとはまったくことなるドイツ中世を提示することが含まれているのである。そして、そのさいに両者をわかつ要素はゲルマン的な本質にはかならない。また、べつの箇所ではつぎのようにも語られている。

社会・国家・文化生活の技術の洗練が民族固有の自然な基盤を変化・解体させるいま、われわれは人間的な諸団体の機構の組織化された構築を—それが内在的な独自の発展によるものか外来の影響によるのかはさておき—無条件に決定的な進歩と評価するのではなく、生き

た共同体 *lebendige Gemeinschaften* が組織化からではなく、内的な連帯からもたらしたほんらいの活力にみちた統一が消滅する徴候をもそこに見るのである<sup>12)</sup>。

この論稿の作成には、民族固有の自然な基盤が変化・解体しつつあるという現状にたいする危機認識がつよく作用している点を見逃すことはできない。このような歴史観はなにもポーズのひとつのものではない。むしろ、問題を深刻にしているのは、こうしたアナクロニスティックな理解が表明されたとしても、それに正面切って批判を浴びせるものがあらわれないという旧西ドイツ中世史学界の体質そのものなのである。いっぽう、戦前の民族至上主義的な風潮にたいする反省から、民族とは空想的なイメージ、すなわち幻想の産物にすぎないと主張する者もある。こういった声が、良心から発せられていることは疑いをいれない。しかし、はたして、問題の解決にはそれでじゅうぶんだといえるのであろうか。たとえ民族が幻想の産物にすぎないとしても、それは観念のレベルにとどまっているものではなく、表現されたり描写されたりして、かたちとなって残るものである。たとえば、タキトゥスの『ゲルマニア』のように。残ったかたちは発見され解釈を施されて、またあらたなかたちを生む。そして、これが反復を繰り返すうちに、強固な伝統が形成される。ゲルマン＝イデオロギーやアルミニウス信仰がこれにあたるといえよう。そのさい、必要とあらば圏外にあるものが篡奪されることもあり、逆に、ほんらいそこにあったものが捨棄されるばあいもある。前者の例としては北欧の文化遺産が、また、後者の例としては中世の分離主義的な傾向のつよい出自神話が挙げられよう。こうして、われわれは、意識するかしなにかにかかわらず、また好むと好まざるにかかわらず、かたちとなってあらわれた無数の種族意識のなかで暮らしているのであり、それこそがほんらいの問題とされなければならないのである。ここで振りかえった出自神話のたどった数奇な運命が、なによりもそのことを教えてくれているのではなかろうか。

- 1) 戦後の歴史教育についても、ギゼラ・タイストラ女史の御教示を受けることができた。また、ドイツの歴史教科書を取りまく問題にかんしては、藤沢法暎『ドイツ人の歴史意識 教科書にみる戦争責任論』（亜紀書房、1986年）をも参照した。
- 2) H. Ebeling u. W. Birkenfeld, *Die Reise in die Vergangenheit Bd. 1*. なお、この教材には邦訳もある。（成瀬治、古山正人訳）『世界の歴史教科書シリーズ12』帝国書院、1982年。ここでは、この邦訳に依拠した。
- 3) K. Bosl, *Die Germanische Kontinuität im deutschen Mittelalter* (Adel-König-Kirche), (P. Wilpert, hrsg. v.), *Miscellanea Mediaevalia Bd. 1, Antike und Orient im Mittelalter*, Berlin 1962. ここでは、K. Bosl, *Frühformen der Gesellschaft im mittelalterlichen Europa*, München 1962. に再録されたものに依拠した。
- 4) *Ebenda*, S. 80-82.
- 5) E. Hobsbawm, Introduction: Inventing Traditions, (E. Hobsbawm and T. Ranger, ed.,) *The In-*

*vention of Tradition*, Cambridge 1983. なお、この論集には邦訳もある。（前川啓治他訳）『創られた伝統』紀伊國屋書店、1992年。訳出にあたっては、前川氏の訳文を参照させていただいた。

- 6) *Ibid.*, p. 1.; 前掲書, 9 ページ。
- 7) *Ibid.*, p. 2.; 前掲書, 10 ページ。
- 8) *Ibid.*, p. 12.; 前掲書, 24 ページ。
- 9) *Ibid.*, p. 13.; 前掲書, 25 ページ。
- 10) *Ibid.*, p. 13.; 前掲書, 25 ページ。
- 11) K. Bosl, *a. a. O.*, S. 84.
- 12) Ebenda, 84f.

〔追記〕 本稿は、平成二年度文部省科学研究費補助金奨励研究（A）による研究成果の一部である。